BIOHAZARD　DEADLINE

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＩＯＨＡＺＡＲＤ　ＤＥＡＤＬＩＮＥ

【Ｎコード】
Ｎ３００８Ｅ

【作者名】
髭伯爵

【あらすじ】
ラクーンシティのバイオハザードに巻き込まれた日本人の高校生平山健。彼の戦いが始まる・・・。

第1話：準備

周囲には地獄が溢れ。

目の前には惨劇が広がっている。

自分はただただ呆然とするしかなかった・・・。

先程逃げこんだ建物の二階から少年は半ば呆然と外を見ていた。外には逃げ惑う人々、人々をおぼつかない足取りで追う人間・・・、いや、人間だったもの。

逃げていた人々の一人、中年とおぼしき男性が突然肩を掴まれた。男性がそちらを見ると、一人の男が肩を掴んでいた。男の服はぼろぼろで所々血が付いていた。左頬の肉が欠けており、目にはあるべき光が無かった。

体から腐敗臭を漂わせるソレは、映画に出る”ゾンビ”と同じだった。

ゾンビは口を大きく開けると、恐怖で動けなくなっている男性へと食らいついた。

それを見ていた少年は目を背けた。男性の悲鳴が聞こえると、窓から離れた。

彼、平山健がここ、ラクーンシティに来たのは一ヶ月前に父親と高校卒業後の進路について喧嘩してしまい（健は警察官志望だったが、父親は反対した）、口論の末に勘当されてしまい、家を追放さ

れたのが原因だ。
その後、何とかパスポートを入手しアメリカに渡り各地を転々とし、1週間ほどラクーンシティに滞在していると・・・。
「・・・街のいたるとこにゾンビみたいなのがでてくっし、どうなってんだよ・・・。」
健は途方にくれた様子でつぶやいた。
電話はなぜか繋がらず、大量のゾンビのせいで街の外にも出られず、なんとかこの家に逃げこんだのだ。
家の中には誰もおらず（血痕はあったが・・・）、健はしばらく休むことにしのだ。
（麻衣姉にここにいんの教えといたから今頃泡食ってんだろぉなぁ・・・。）
家族で唯一連絡をいれている姉の慌てぶりを想像し、おもわず苦笑してしまう健。
おもむろに立ち上がると体を伸ばし、いつでも動けるようにする。
「さてと・・・。そんじゃ、家族の面もっかいみたいし、がんばっか。」
「まずは装備の確認をするか。」
そう言うとショルダーバッグから荷物を取り出していく。

「武器はナイフとデザートイーグルだけか・・・・。」

床にはチンピラを返り討ちにした時手に入れた折りたたみナイフとデザートイーグル（３５７マグナム仕様、装弾数９＋１発）、パスポートと財布が置かれた。

「弾はマガジン２本にバラの弾が３０ぐらいか・・・・。」

あれだけの数のゾンビ相手には明らかに貧弱な装備に思わずため息が出た健。周囲を見てもこれといって武器になりそうなものはなかった。

「・・・他の部屋も調べっか・・・・。」

しばらく家の中を調べていると、２丁の銃を見つけた。

１丁はＳ＆ＷＭ６０。装弾数５発、３８口径のリボルバーで、もう１丁はレミントンＭ８７０。銃身が切り詰められストックもない仕様で装弾数５＋１発の散弾銃だ。

２丁とも弾は比較的多く見つかり、健は弾を装填していった。

「とりあえずこれでなんとかなるだろ。次はどうすっかな・・・・。」

街から脱出するにも情報がろくに無いためどこへ行けばいいかわからず、床に広げた地図を睨む。

健が考えこんでいると、突然玄関のドアが思い切り叩かれた。

第2話：出会い・出発

「！」

健が驚いて振り返ると、玄関のドアが激しく叩かれていた。
Ｍ８７０を構えてドアに近づきのぞき穴から外を見ると、３人の男女がいた。
健と同じ位の少年と少女がドアを叩き、もう一人の少女が背後に集まってきたゾンビへ銃を撃っている。
健は鍵を開けるとすぐにドアを開き近くにいた二人を中へと引っ張る。
二人が驚いた顔をしていたが無視し、腰から抜いたＭ６０をゾンビ達へ発砲した。

パン！　パン！

少女の横から襲いかかろうとしていた2人のゾンビが頭を打ち抜かれ、その場へ倒れた。

「早く中へ！」

少女の驚愕と警戒の混じった目を正面から受けつつ健が叫ぶと、少女は一瞬ためらった後家の中へと入った。彼女が入るのとＭ６０の弾が切れるのは同時だった。
健はＭ６０をしまい中へ入ると急いで鍵を閉めた。数瞬後にはゾンビ達がドアを叩き始めたが、しばらくするとその音も止んでいった。

「・・・ふう～～～～。」

少年がほっとした様子で息を吐くと、銃を持った少女が健へと近寄った。

「あんた誰？　何でアタシの家にいんの？」

他の二人は遠巻きに見つめていた。健はＭ６０に弾を装填しつつ答える。

「俺は平山健。一週間前からこの街にきてた。ここにはゾンビから逃げてるときに偶然逃げこんだんだ。・・・君らは？」

「アタシはレイン。レイン・カウナー。この家に住んでる。」

銃を持った少女ことレインが答える。

「私はケイト・グリーンです。あの、さっきは・・・。」

「俺はダン・ホーストだ。よろしくな。」

ケイトの言葉を最後まで言わせずダンが自己紹介をする。ケイトは不満そうだったが何も言わなかった。

「なぁ、アタシの家族はどこだ？」

「・・・俺が来たときには誰もいなかったぞ。」

「そんなバカな！？　いない筈がない！」

レインが健へと詰め寄るのをケイトが宥める。

「落ち着きなよ！」

「うるさい！　まさかお前が・・・！」

「違う！俺は本当に知らない！仮に何か知ってたら必ず言ってる！」

「・・・本当か・・・。」

レインの言葉に健は無言で頷いた。レインはしばらく健を睨んでいたが、肩から力を抜くと睨むのをやめた。

「・・・わかった、信用する。」

「ちょ、おいこんな奴信用すんのか？」

「・・・悪かったなこんな奴で。」

ダンが抗議すると、レインが答えた。

「少なくともコイツはアタシらを助けてくれたんだ。だったら少しは信頼できるだろ。」

「私もそう思う。」

女性二人の意見に反対できずに黙るダン。

「んじゃ話もまとまったみたいだし、これからのことを相談しねーか？　互いの情報もまとめたいしよ。」

健の提案により、四人はリビングで話し合いをすることになった。

「今アタシ達がいるのがここだ。大通りの近くだ。」

レインは地図に丸を書く。

「俺は東の方から逃げようとしたんだけど、ゾンビや事故車なんかが邪魔で無理だった。」

健は地図の東側の道に×を書いていく。

「私達は南から逃げてきたんだよね？」

「ああ、こっちもゾンビがわんさかいたぜ。レインがいなかったらやばかったぜ・・・。」

「つーわけで南も無しっと・・・。」

レインは地図の南に大きな×を書く。

「・・・バツでかすぎだぶっ！！」

バツのでかさに突っ込もうとした健にレインのパンチが叩き込まれた。鼻を押さえて床を転げまわる健。

「ぐおお・・・」

「・・・余計なこと言おうとすっからだ・・・。」

呆れた口調で呟くダン。レインは無視して進めていた。

「となると北か西へ向かうしかないか・・・」

「なあ、ここに警察署があっから、ここに避難しちまおうぜ。」

ダンが指差した場所はここからさほど離れた場所ではなかった。

「じゃあここに・・・。」

「やめといた方がいいぞ。」

ケイトが賛成しようとしたとき、健が起き上がり（微かに涙目）反論した。

「なんでだよ、警察ならおまわりが守ってくれるだろーし武器だって・・・。」

「ほとんどの警官は大通りでゾンビと戦って死んだし、ゾンビに噛まれたやつが中にいたら、今頃署内にいる人達は・・・。」

「あ・・・。」

「な・・・。」

健の意見に絶句するダンとケイト。そうなると、ほとんどの避難場所は全滅している可能性すらでてくる。

あまりにも絶望的な状況に４人の空気が重くなる。

「脱出方法はないの・・・？」

「・・・市街地を徒歩で移動して北か西から脱出するしかないな・・・」

「バカじゃねえのか！？外にはゾンビがわんさかいるんだぞ！」

「避けれる時は避けたっていい。別にゾンビを倒しにきたわけじゃないしな。」

「けどよ・・・。」

「うるさい。」

健とダンの議論をレインが止めた。

「警察が当てにならない以上、自分達でどうにかするしかないんだ。」

「・・・。」

「アタシは生きたい。だからケンの案に乗る。」

「私も乗る。・・・どうせアテもないしね。」

レインが同意し、ケイトも同意した。

「あんたはどうすんの、ダン。」

レインの言葉に、ダンは「・・・わかったよ。」としぶしぶながら同意した。

「よし、じゃ準備でもするか。」

３０分後、４人は準備を終えて玄関へ集まっていた。

健は愛用のデザートイーグルと家の中で見つけた長めのバール、レインはコルトガバメント（４５口径ハンドガン、装弾数７＋１発）、ケイトはＭ６０と医薬品の入ったリュック、ダンはＭ８７０と食料の入ったリュックを持っていた。

「・・・みんな、覚悟は決まったか？」

健がドアノブを掴みつつ言う。ケイトは真剣な目で頷き、ダンはそっぽを向いている。レインは不適な笑みを浮かべ親指を立てた。

健はレインの様子をみて苦笑するとドアを開けた。

第3話：大通りへ

健は素早く外へ出ると周囲を確認した。幸いにもゾンビはおらず、健は銃口を下ろした。

「どっかいったみてえだな・・・。」

「一体どこへ行きやがったんだ？」

健の後ろで警戒していたレインは周囲を見ながら呟く。

所々に血や肉片らしき物が付着し、物言わぬ死体が転がっていたが、ゾンビの姿は無かった。

「い、今の内に早く進みましょうよ。」

震える手でＭ６０を構えるケイト。周囲の凄惨な状況に顔が青ざめている。

「ケイトの言うとおりだ。とっとと行こうぜ。」

４人はそのまま大通りへと向かった。

しばらくはゾンビに出会うことは無かったが、ときおりゾンビのうなり声が聞こえてきた。

「思ったより静かだな・・・。」

ダンが周りを警戒しながら呟く。街はゾンビのうなり声がたまに聞こえるぐらいで、まるで嵐の前の静けさのようだった。

「生き残ってんのはほとんどいないんだろ。こんな状況だしな・・・・。」

健が近くの死体を見ながら言う。内蔵がほとんど無くなっているのに気づき、死体から目線を外す。

「もしかして、生き残ってるのは私達だけなんじゃ・・・・。」

ケイトは近くのアパートを見ている。いくつもの窓が血で染まっており、中の人間がどうなったかを無言で教えていた。

健はケイトと同じくアパートを見ると、疲れたように息を吐いた。

「・・・もしかしたらそうかもしれない。けど、それがどうかしたか？」

「どうって・・・・。」

「アタシ達はなにがなんでも生き残る。たとえアタシ達以外みんな死んでても、そのことには変わりないんだ。」

健が言おうとしたことをレインが話していく。その喋りはよどみなく、あたかも当然の事のように続けていく。

「だったら、そんなこといちいち気にしたって意味はないんだよ。」

「考えてる暇があるんなら、早くこの街を出ようぜ。」

「で、でも・・・・。」

健とレインが諭してもまだ不安そうなケイトに、健は力強い笑み

を浮かべた。

「それにまだ俺達がいるんだ。絶望するには少し早いぜケイト。」

ダンにも励まされ、ケイトの顔にもようやく笑みが浮かんだ。

「・・・うん、そうだね。ごめんね、心配かけちゃって・・・。」

「気にすんな。だれだって辛いんだ。無理したってしょうがねえよ。」

バン！！

突然アパートのドアが勢いよく開き、中からゾンビが2体出てきた。

1体のゾンビが近くにいたケイトへと食らいつこうとする。突然の襲撃にケイトは対処できず、ただ呆然と自分へと向かってくるゾンビを見ることしかできない。

「ケイト！！」

誰かが自分の名を叫んだような気がしたが、もはやケイトには誰だかわからなかった。

ドン！！ドン！！

ケイトが次の瞬間にくるであろう痛みに目をつむった直後、銃声が響いた。想像していた痛みがいつまでも来ないことを不思議に思い、ケイトが恐る恐る目を開けると、彼女に向かってきたゾンビは側頭部を撃ち抜かれて倒れていた。そして銃口から硝煙の出ている

デザートイーグルを構えた健の姿があった。

「だからこんなことで諦めんなっつってんだろ。」

健は不機嫌そうに言うとアパートへと銃口を向ける。

「どんな腕してんだよ・・・。」

ダンがゾンビの死体を見て絶句する。アパートから出てきた2体のゾンビはそれぞれ別の場所にいたにもかかわらず正確に頭部を撃ち抜かれていた。

「アタシだってここまで上手く撃てねえのに・・・。」

「はいはいサインはあとあと！　とっとと逃げんぞ！」

アパートからは別のゾンビが次々と出て来ていた。先に気づいていた健以外の3人がそのことに気づくと一同は急いでその場から離れた。

周囲を見ると、他の建物や横道からも次々とゾンビが現れていた。4人は必死になって走りゾンビ達を撒こうとするが、ゾンビ達はいたるところから現れ、獲物を捕らえようと襲い掛かってくる。

「くそ！　一体何匹いんだよコイツら！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！

レインが叫びながら横から来たゾンビ3体にコルトガバメントを連射した。弾は先頭にいたゾンビ2体の頭部を撃ち抜いたが、もう1体のゾンビは一発は外れ、もう一発も胸部に命中しよろめかせた

だけだった。

「ちっ・・・。」

レインは舌打ちすると残ったゾンビへと狙いを定めようとしたが、健が撃つのをやめさせた。

「別に全部を倒さなくてもいい。弾の無駄だ。」

「・・・それもそうか。」

レインは走りながら銃からマガジンを抜くと、ポケットから予備の弾を取り出し使用した弾をマガジンへと補充していく。

「このバケモンどもがぁ！！」

直ぐ後ろではダンがＭ８７０を連射し、近くにいたゾンビ達が次々と倒れていく。
しばらく４人は走り続け、なんとかゾンビ達を振り切ることに成功する。

「はあ・・・、はあ・・・、　つ、疲れた・・・・・・。」

「アタシ・・・、こんなに・・・、走ったの・・・、久しぶりだ・・・。」

「お、俺も・・・・・・。」

「・・・・・・。」

周りにゾンビがいないのを確認すると、その場で休憩することにした4人。レインは肩で息をしており、健とダンは地面に座りこんでいる。ケイトにいたっては喋ることすら出来ないようで、口から荒い呼吸を繰り返すだけである。

「お～いケイト～、生きてるか～～～？」

「・・・な、なんとか・・・。」

レインが声をかけると、途切れ途切れに返事が返ってきた。控え目に見ても大丈夫そうには見えないが、しばらく休めば復活するだろう。

健はマガジンへ弾を補充しながら、周囲を確認する。どうやら走っている内に大通りへと辿り着いていたようだった。周囲には死体や炎上していたり事故を起こしたらしい車がいくつもあり、そのどれもがパトカーなどの警察車両だった。

「おい、これ・・・。」

「・・・確かに、これじゃおまわりはみんな死んでんだろうな・・・。」

「ひどい・・・。」

健を除いた3人があまりの惨状に驚愕の表情を浮かべた。

死体のほとんどは苦悶や恐怖の表情を浮かべたまま絶命しており、なかには事故車両に挟まれたまま死んでいるものもおり、彼らがどれだけ凄惨な死を迎えたかを知らしめていた。

健はしばらく無言で通りを見ていたが、突然1台の車へ近づいていく。

レインは健の突然の行動に驚きながらも急いで追いかける。

「ちょ、突然どこに行くんだよケン。」

「パトカーの中に何かないか探す。」

レインの問いかけに淡々とした言葉で返す健。そのまま車の中を物色していく。

「それとも、彼らから装備を譲ってもらうか？　もう使わないだろうしよ。」

「それはちょっと・・・。」

「お、見っけ。」

健はパトカーのダッシュボードからグロック17（9ミリ口径弾使用、装弾数17発）を見つけた。ダッシュボードからは予備の装填済みマガジンも見つかった。

健はパトカーにはもう何も無いことを確認すると物色するのをやめ、グロック17をレインへ差し出す。

「ほら、持ってろ。」

「え？あたしが？　・・・アタシよりケイトに持たせた方がいいだろ。一番装備が貧弱なのはアイツだぜ？」

「この銃は威力が低いから、射撃の腕があるお前が持ってたほうがいい。ケイトは俺がカバーすっから。」

「・・・わあったよ。」

レインはしぶしぶといった様子で銃を受け取る。

健は車からキーを抜くと後部のトランクへ向かいキーでトランクを開けた。中にはモスバーグＭ５００（１２ゲージショットガン、装弾数６＋１発）とコルトＭ４Ａ１カービン（５．５６ミリライフル弾使用、装弾数３０発）の２丁が入っていた。

健はモスバーグを手に取ると、ケイトへと手渡す。

「これは君が使え。」

「わ、私はいいよ・・・、あんまりうまくないし・・・。」

「弾は散弾だから大雑把に狙って撃てば当たるし威力高いから近くにいる奴は吹き飛ばせれる。持ってろ。」

ケイトは恐る恐る銃を受け取り、銃の重さに驚く。

「けっこう重いんだね・・・。」

「まあな。」

「あ、アタシが撃ち方とか教えとくよ。」

ケイトはレインからショットガンの撃ち方を教わっていく。健はその間にもう１丁の銃を取り出す。

「それって軍隊でも使ってるやつだよな。」

「ああ。アメリカ軍正式採用の銃だ。」

健はＭ４の点検をしていく。民間用のフルオート機能の取られたものではなく、銃身にはレイルシステムが付いておりトランクに一緒に入っていたライトを銃身左側に取り付け、銃身下部にはフォアグリップを取り付けた。

「これで狙いやすくなったろ。」

「・・・手馴れてないか？」

「日本にいた頃から銃には興味があったんでな。さて、これは誰が使う？」

「俺が・・・。」

「ケン、お前が使えよ。」

「いやあの俺が・・・。」

「うん、健くんが使いなよ。」

「んじゃそうするか。」

（健くんて・・・。）

ケイトの可愛い呼び方に内心呆れつつＭ４のマガジンを上着の内ポケットに入れていく。ちなみにダンは何度も無視されたので地面に座り込んでしまい、健はケイトがレインから銃の説明を受けている間ダンを慰める羽目になってしまった。

「うう・・・、どうせ俺はいらない子だよ・・・。」

「だから違うって・・・・。」

「俺に構ってくれるのはお前だけだよ・・・。」

「はあ・・・・・・。」

このおかげでダンは健を信頼するようになったが、健は素直に喜ぶことができなかった。

「準備できたか～？」

「ＯＫです。」

「こっちもだよ。」

「俺もだ。」

全員の準備が整うと（ダンもなんとか復活した）一行は再び移動を開始した。

「・・・ん？」

しばらく進むと、突然先頭にいたレインが足を止めた。

「どうした？」

隣にいた健が聞くが、レインは何かに集中しているらしく、何の返答も無い。だが目を瞑っているレインの様子に何かを感じ取ると、

M４の銃床を肩につけるように構え周囲を警戒する。
ダンとケイトもショットガンを構えて襲撃に備える。

「・・・ゾンビか？」

「いや、違う・・・。多分犬だと思うんだけど・・・。」

「いぬう？脅かすなよ。」

ダンが拍子抜けしたように銃を下ろす。続けてケイトも下ろしたが、健とレインだけが警戒を続けていた。

「どうしたんだよ？」

「・・・やな予感がする。」

「奇遇だな、俺もだ。」

「ね、ねえみんな・・・。」

ケイトがなぜか震える声で仲間を呼ぶ。不思議に思いながらケイトの方を向くと、ケイトの声が震えていた理由がわかった。
ケイトが震える手で指差す先には１匹のドーベルマンがいた。しかし、そのドーベルマンには片方耳が無く、体のいたるところが腐っており、肋骨のようなものが見えていた。
それは明らかに犬のゾンビだった。

第3話：大通りへ（後書き）

あんまし戦闘シーンが書けず、しかもわりと長くなってしまいました。次こそは・・・！

第４話：魔犬と魔狼（前書き）

何か書くたびに長くなってます。

第４話：魔犬と魔狼

グルル・・・。

ゾンビと化したドーベルマンはゆっくりとした歩調で４人に近づいてくる。たまに動いた時に体の一部が落ちていたが、気づいていないのか平然と歩いてくる。

ケイトとダンの顔は青ざめ、健とレインも二人ほどではないが顔色を悪くしていた。

「な、何だよあれ・・・・・・。」

「ドーベルマンだろ。ったく、厄介な・・・。」

「で、でも何でゾンビに・・・。」

「さあな・・・、それは考えたって意味無えんだろうし・・・。」

「な、なんかこっちをずっと見てんだけど・・・・・・。」

「多分あの目は・・・。」

健がそこでいったん言葉を切ると、突然ゾンビ犬が走り出した。

「獲物を狙ってる目だ！！」

健はそれを予期していたのか、素早くＭ４の狙いを定めると引き金を引いた。

ガガン！！！

キャイン！

発射された2発の5．５６ミリ弾は正確にゾンビ犬の頭部に命中し、ゾンビ犬は断末魔の声を上げながら後ろへ吹き飛ばされ絶命した。

ゾンビ犬が完全に死んでいるのを確認するとダンとケイトはほっとしたように息を吐いた。

「こ、こええ・・・。」

「けど、これはやばいんじゃないか？」

「え、なんで？」

レインの問いに首を傾げるダン。するとケイトがそれに答えた。

「人間だけじゃなく犬までゾンビになってるってことは、この街のあらゆる生き物がゾンビになってるってことよ。」

「ええ！？　う、ウソだろおい！？」

ケイトのとんでもない答えにパニックになるダン。

「この先、何が出てくるやら・・・。」

健が半ば諦めたように呟く。

「じ、じゃあ早くここから脱出しようぜ！　これ以上のはごめんだ

！」

「ダン、落ち着いてってば・・・。」

「？　レインどうした？」

健が先程からおとなしいレインを不審に思い声をかけるが、レインは険しい表情をしているだけで何の反応もしなかった。

「！まさか・・・！」

健がある可能性にたどり着き、慌てて周囲を確認しようとすると、すぐに答えが返ってきた。

ぐるるる・・・。　ごるるる・・・。

「！！」

「え・・・！」

「くそ、しまった・・・・・。」

周囲から聞こえてくる複数のうなり声。しかも二、三匹程度ではなく明らかにかなりの数がいるようだった。

既に少し離れた所には数匹のゾンビ犬が姿を見せていた。

「え、なんで・・・！？」

ケイトがショットガンを構えるが、持つ手が恐怖で震えていた。

レインが悔しそうな表情を浮かべる。

「最初に考えとくべきだった・・・。犬は元々集団で狩りをする生き物なんだ、だから仲間がいることくらい予想できたのに・・・。」

「反省会はまた今度な！　今はこいつらを倒すのが先だ！！」

健はレインを励ますように叫ぶとゾンビ犬達へ銃を向ける。
ゾンビ犬たちは前後から挟み撃ちするように集まっていたが、一定の距離をおいて待機していた。
健は数の多い後ろに行くと3人へ指示を出していく。

「レイン、ダンは前の奴等を頼む！　ケイトは俺と後ろのワン公どもの相手だ！」

「了解！まかせな！！」

「わ、わかったぜ！！」

レインとダンは指示どおりに前に行き銃を構えた。
ふと健は隣にきたケイトの顔色が良くないのに気づいた。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫・・・。」

ケイトが返答を返してきたが、声には力が無かった。健はケイトの肩に手を置き、彼女に向けて笑いかけた。

「安心しろ、カバーするっていったろ？」

「ケン・・・・・・。」

「近くに来た奴だけねらってくれ。頼んだぜ？」

「・・・わかった、任せて。」

健の言葉に勇気づけられケイトはショットガンを構え直した。手の震えは消えていた。

レインはそれを見ていて何故か不機嫌になってしまった。

（何でアタシはイラついてるんだ？　健は別にケイトが好きなわけじゃ・・・って何考えてんだアタシは！？）

自分の心が整理できず、慌ててしまうレイン。

「どうした？なんか変だぞお前？」

「な、何でもない！」

「？」

ダンが心配して声をかけるが、レインは顔を真っ赤にしてさらに慌てるだけだった。

その時、突然大きな遠吠えが響いた。健とレインは直感でその声が合図だと悟ると目をゾンビ犬達へ向けた。

「来るぞ！！」

健の叫びが戦闘開始のゴングとなった。

「失せろ犬コロども！！！」

ガガガガガガ！！！

キャイン！！　ギャウン！！

健がＭ４を連射する。発射された５．５６ミリ弾が一発も外れることなく命中していき、次々とゾンビ犬達を屠っていく。

ガルルル・・・！

一匹のゾンビ犬が横の車の陰から飛び出し健へと飛びかかろうとする。健は何故かそちらには見向きもせず銃撃を続けていく。

ゾンビ犬が空中で大きく口を開けたとき、轟音が響き、ゾンビ犬は頭を吹き飛ばされ車にぶつかった。

轟音の正体はケイトのショットガン・Ｍ５００だった。

「させないわよ！！」

ケイトはショットガンのスライドをポンプさせ薬室へショットシェルを装填する。

先程から健の銃撃を抜けてきたゾンビ犬はケイトの散弾を受けて返り討ちにあっていた。

一方レインとダンも負けてはいなかった。

二人とも近づいてきた敵のみを撃っていたが、確実に数を減らしていき、ケイトとダンの銃が弾切れになったとき、周囲のゾンビ犬

はすべて動かなくなっていた。

「・・・もういないよな・・・？」

ダンがショットガンに弾をリロードしながら尋ねる。

するとダンの問いに答えるかのように前後から一匹づつゾンビ犬が現れた。だがその2匹は他のゾンビ犬とは違っていた。体は明らかに2まわり以上大きく、首にはたてがみのようなものがついていた。

健がそれの正体に気づき愕然とする。

「おいおいマジかよ・・・・・・・。」

「なんかやばそうな気が・・・・。」

「あれってまさか・・・・。」

「狼だろ・・・・。」

ゾンビ化したオオカミはまだ離れた場所にいたが安心はできなかった。ゾンビウルフの出す雰囲気がかなりのものだったからだ。レインですら銃を持つ手がかすかに震えていた。

「ど、どうする？」

「どうもこうも向こうはぜってえやる気だぜ。やらなきゃ殺られるぜ・・・・。」

「でも、勝てんのか・・・・？」

珍しくレインが弱気な発言をする。それを励ましたのは健だった。
「レイン、しっかりしろよ。俺達は必ず生き残るんだ。こんなことで絶望するんじゃねえよ。」
健はにっと笑った。だがレインは健のＭ４のグリップを持つ手が必要以上に握られているのに気づいた。
（コイツは、自分だって怖いはずなのに、アタシの心配を・・・。）
「・・・・・わかった、こっちのやつは任せろ。そっちはまかせていいよな？」
レインは健の優しさに助けられ勢いを取り戻すと不適な笑みを浮かべた。
健はその様子を見て安心すると同じような笑みを返した。
「ああ、任せろ。・・・ダン、レインをサポートしてやれ。」
「了解！！」
「近くに来たら任せて。」
「頼むぜケイト。」
４人はそれぞれ相手に向き合うと銃を向けた。ゾンビウルフも４人が臨戦態勢になったのを察したらしく低いうなり声を上げ始め、体をいつでも飛びかかれるようにしている。
次の瞬間、ゾンビウルフが２匹同時に走り出した。
すかさず健とレインが銃撃を開始する。だがゾンビウルフのあまり

の移動スピードに弾はわずかにかするだけだった。

「くそ、早すぎる！！」

カチン！！

Ｍ４から乾いた音が響いた。先程から撃ちつづけていたＭ４がついに弾切れになったのだ。

「こんなときに！！」

健は咄嗟にデザートイーグルを抜こうとするが、ゾンビウルフはその隙に距離を詰めようとする。

「こないで！！」

ケイトがＭ５００を撃つがあまりのスピードに当てることができない。その間にゾンビウルフが近づいて来る。

「くっ！！」

健は咄嗟にケイトを突き飛ばす。自分も横に転がろうとしたが、ゾンビウルフが突っ込んできた。

「ぐはっ！！」

腹部にタックルを思いきり食らい地面に倒される健。ゾンビウルフはそのまま健の上に乗ると、獲物に食らいつこうとする。健は両手で何とか咬まれるのを防いでいるが、長くは持ちそうになかった。

デザートイーグルはタックルされた時に持っていた手から落ちて

しまった。そもそも少しでも力を緩めると首を食いちぎられてしまう。
健が必死に打開策を考えていると、突然ゾンビウルフの力が一瞬だけ弱まった。
「死なせるもんですか！！」
ケイトがＭ６０を抜いて発砲していた。連続で撃ち込まれる３８スペシャル弾にゾンビウルフの力が一時的に弱まる。健はその隙を逃さず、右手で腰のベルトに差していたバールを逆手に掴むとゾンビウルフの頭部に突き刺した。
ウオオオオオオ！！
「うるせえとっととくたばれ！！」
ゾンビウルフの雄たけびにも怯まず、健は刺したままのバールを滅茶苦茶に動かす。
脳をかき回され、ゾンビウルフは力尽きた。
「へっ、ざまあみやがれ・・・。」
地面に倒れたままレイン達を見ると、レインが地面に倒したゾンビウルフにとどめをさすところだった。
「健くん、怪我はない！？」
ケイトが急いで駆け寄りながら心配そうに尋ねる。目には涙が溜まっており、今にも泣き出しそうだった。健は彼女を心配させまいと自力で起き上がる。

「大丈夫だって。ケイトのお陰でなんとかなったよ。サンキューな。」

「いったでしょ。近くに来たらまかせてって。」

「あはは、そうだったな。」

「二人とも大丈夫か～～～？」

ダンの呼ぶ声に二人が振り返ると、レインとダンが近づいてきていた。

「ああ、なんとか・・・。そっちも無事か。」

「当たり前だ。アタシが相手をしたんだぜ？」

「めちゃめちゃ怖かったぞ。あのバケモンをさんざん痛めつけた後にゴミのよーに始末したからな。」

「・・・・・アンタも始末してやろうか？」

「ヒイ！！！」

レインが地の底から響くような声で脅すとダンは悲鳴をあげた。

「・・・ま、みんな無事だし、とっとと進もうぜ。」

笑うのをこらえつつ健が言うと、一行は街から脱出するために歩き出した。

第5話：デパートにて・・・（前書き）

今回は新キャラ登場です。

第5話：デパートにて・・・

ガン！！ガン！！ガン！！　ドサドサドサ！
うおお・・・。　うああ・・・。

銃声とともに何か重量のある物が倒れる音がした。
走りながら銃を撃った健は一向に後ろのゾンビの数が減らないのに舌打ちしつつ走るのに集中する。
４人はゾンビ化した犬と狼との戦闘後、大通りを抜け街中を歩いていたのだがいつの間にかゾンビが集まってきていたのだ。

「おい！　また早いのが！！」

「またか！！」

健とダンが曲がり角から来たやけに足の速いゾンビを迎撃する。
しかもこの通りには足の速いゾンビが何体もおり、ゾンビの追撃を振り切ることができなかった。

（くそ、どうする・・・！）

健が走りつつ考えを巡らすと、前方に扉の開いている建物が目に入った。

（！あれだ！）「３人共！あそこへ！」

「中にゾンビがいたらどうする！？」

「アタシは鬼ごっこよりかくれんぼの方が好きだね！！」

「わたしも！！」

４人は全速力で中に入ると扉を閉め、中にある物を使ってバリケードを作っていく。バリケードが完成すると４人はその場にへたり込んだ。

「今日はこんなんばっかり・・・。」

「あんまり体力ある訳じゃないんだが・・・。」

ダンとケイトの２人は床でノビていて、しばらく動きそうになかった。

「んで、ここはどこだ？」

どうやらどこかの物置のようだが、ラクーンに来て日が浅い健にはここがどこか分からなかった。すると、ようやく呼吸が整ってきたケイトが健の問いに答える。

「ここって確かこの街で一番大きいデパートよ。私ここでアルバイトしてたから知ってる。」

「それじゃ案内頼む。」

「任せて。」

ケイトを先頭に一行はデパート内を散策していく。

「・・・静かだな・・・。」

デパートの中は不気味に静まり返っており、４人の足音だけが響いていた。

「皆どこに・・・。」

「心配すんな、すぐに避難したんだろ。」

不安そうなケイトを健が励ますが、不安は最悪の形で当たってしまう。

２階に上がると直ぐに誰かが倒れていた。ケイトは悲鳴を上げることはなかったが、健の腕にしがみついていた。

健はケイトの手に自分の手を添えるとゆっくりと剥がしダンにケイトを預けるとレインと一緒に２階を見回る。

一番最初に見つけた死体に健が近づく。

「・・・よく調べれんな。怖くないのか？」

「死体が動くよりはマシだろ・・・、ん、こいつは・・・。」

「どうした？」

「こいつだ。見ろ。」

健は死体の頭を指差す。頭部は何かに貫かれており、傷は貫通していた。

「まさか銃か！？」

「いや、銃なら傷が焼け焦げてる。何か細長い物で貫かれたんだ。」

「一体どうやって・・・・・。」

「他のも調べてみよう。」

そう言うと健は死体から離れようとしたが、近くにあった服を取ると死体に掛け、手を合わせた。レインも十字を切ると調査を再開する。

調べた結果合計で４体の死体を見つけたが、２体が最初の死体と同じく頭を貫かれ、残りは体を切り裂かれていた。

「この切り口・・・、刃物じゃないな。」

「そうなのか？」

「切り口が粗いんだ。刃物なら多分斧かもしくは・・・。」

「・・・化け物にやられたか、か？」

健は無言だったが、それは肯定しているのと同じだった。

「・・・会わないこと祈るだけだな。」

２人はそのままダンとケイトの所へ行こうとした。その時、奥から音がした。

「「！！」」

２人は目を合わせ頷き合うと、健はデザートイーグル、レインはグロック１７を構えて音のした方へと向かう。

音は「従業員詰め所」とネームプレートに書かれた部屋から聞こえていた。

「俺が先に入るからレインは2人を呼んできてくれ。」

「アタシも一緒に・・・。」

「頼む。」

ここまで健に頼み込まれるとレインにはどうしようも無かった。

「・・・やばかったら直ぐに逃げろよ・・・。」

「了解。」

レインは忠告というよりは懇願というような言葉を告げると2人を呼びに向かった。健はその姿が見えなくなると部屋の中に入っていった。

部屋の中からは相変わらず音がしていたが、健はその音に違和感を感じていた。

音は中に入ると二種類になっていた。何かを引っ掻くような音と、なにか湿った物が何度も落ちているような音だった。

健は警戒心を募らせつつ音のする方へと進む。少しして音源を見つけた健は、側に誰も居ないのを激しく後悔した。”それ”は一人で見るには強烈過ぎたのだ。

音源は倒れたロッカーを引っ掻く2匹のバケモノだった。

頭部は脳が露出しており、肌はまるで皮膚を剥かれたようであり、手足には大きく鋭い爪が付いていた。だがなによりも際立っていたのは舌だった。軽く1メートル以上はあろうかという程の長さがあり、その先端は細く尖っていた。

バケモノの1匹は床に四足歩行で張り付いており、もう1匹は壁に張り付いていた。

（ケイトの同僚を殺ったのはコイツらか・・・。）

健は銃をＭ４に持ち帰ると床にいるバケモノに狙いを定める。
今近くにレイン達がいたら彼の雰囲気が変わったのに気づいただろう。彼はいい加減腹を立てていたのだ。この絶望的な状況に。
そしてこのバケモノを見てついに切れてしまったのだ。
健は鬼の形相でバケモノを睨むと躊躇うことなく撃った。

ガガガ！！！　ギギイ！！

床にいた方のバケモノは頭部への正確な3連射により即死した。
健は素早くもう一匹を狙おうとしたが既に床へと降りていた。
バケモノは突然体を丸めた。

「！ヤバイ！！」

それが舌での攻撃だと気づいた健は咄嗟にサイドステップで避けようとする。健が移動した直後バケモノが勢い良く顔を上げ舌を突き出した。舌は間一髪一瞬前まで心臓があった位置を通り過ぎ、バケモノの動きが止まる。健がその隙を逃す筈はなく、すかさずＭ４を撃ち返す。

ガガガガガ！！！

バケモノは5発のライフル弾を食らい吹き飛ぶ。

シャアアアア・・・・。

不気味な声を上げつつ力尽きるバケモノに顔をしかめつつ銃を下ろす健。

ガンガンガンガン！！！

すると突然倒れたロッカーから音がした。

「誰かそこに居るのか！？頼む、ここから出してくれ！！」

どうやら中に誰か入ってたらしい。丁度扉が下になっていて出れないようだ。

「分かりました。ちょっと待ってください。」

健はロッカーに近づくと思いっきり押し、扉が開くようにすると急いで扉を開いた。

中から出てきたのはYシャツにジーンズを着込んだ女性だった。

「よ、ようやく出れた・・・。」

女性はロッカーから出ると立ち上がり健へと笑みを浮かべた。

「すまない、助けられた上に同僚の敵もとってもらってしまって、何とお礼をいったらいいか・・・。」

「いいんです別に。俺が勝手にしたことですから。」

「そうか。私はニーナ・チュースという。このデパートでチーフとして働いていた。・・・もっとも、私以外の従業員は皆もう来るこ

とは無いがな・・・。」

「ここのチーフってことは、ケイトの知り合いか？」

「ケイト！？彼女は生きているのか！？」

「ええ。積もる話もあるでしょうし、まずは俺の仲間と合流しませんか？」

健の提案にニーナは頷き、２人は仲間と合流するために移動した。部屋から出ると丁度こちらへ向かってくる３人が見えた。レインは健に走り寄ると、思いっきりぶん殴った。何故殴られたのか分からず困惑する健。

「な、なんで・・・。」

「やばかったら逃げろって言ったよな！？言ったよな！？」

レインの剣幕に何も言い返せない健。レインの目には涙が溜まっていた。

「心配したんだぞ・・・。」

「・・・ごめん。」

体を震わせて呟くレインに素直に謝る健。すると拍手の音が突然響いた。

「うむ、悪いことをしたら謝る。良い心掛けだ。」

「チーフ！？無事だったんですか！」

ケイトが拍手をした人物、ニーナを見て顔をほころばせる。

「ああ、なんとかな。君も無事だったか。」

「はい！皆と協力してなんとか。」

二人が再開を喜んでいると、ダンが真剣な目で健とレインに呟く。

「なあ、あの二人ってまさかレズじゃ・・・。」

バキッ！！ドゴッ！！

ダンの見当違いの考えにレインと健は無言でぶちのめした。

「？どうしたんだ？」

ニーナは床に倒れているダンを見て首を傾げたが、レインと健は「気にしない気にしない。」と繰り返すだけだった。

その後一行はニーナの提案で情報を整理するため休憩室へと向かった。

「・・・ってオイ！！　俺を置いてくな！！　お～～～い！！」

第6話：ガンショップ（前書き）

今回は戦闘シーンは有りません。

第6話：ガンショップ

４人は3階の休憩室に集まると互いに自己紹介をし、ニーナから話をしていくことになった。

「私はいつも通りここに出勤したんだが、しばらくすると外が騒がしいので確認したら街がゾンビで溢れかえっていたんだ。外に出るのは危険だと思い何人かいた同僚と一緒にここに立て篭ることにしたが、突然店内で悲鳴が上がり、全員パニックになってしまって次々に・・・。」

その時のことを思い出したのか唇を噛むニーナ。だが直ぐに気を取り直すと話を続ける。

「・・・その後私を含めた3人程で従業員詰め所に逃げこんで、少しして二人が様子を見にいったが戻ってこず、もう1人が私にロッカーに隠れているよう告げて出て行くと中に入って待っていたが突然ロッカーを倒され、彼に助けられるまで閉じ込められていたのだ。」

「そっちも大変だったんだな・・・。」

「まあな。・・・そっちはどうだった？」

ニーナの話が終わり、次は健達が経緯を話す番だった。

健とレイン達との出会い、ゾンビの大群、犬と狼のゾンビとの死闘・・・。

全てを聞き終わるとニーナは呆れたようにため息をついた。

「ずいぶんと暴れているな・・・。」

「好きで暴れてるわけじゃねえぞ・・・。」

「でも実際大変でしたよ。何度も危ない所がありましたし・・・・・・・。」

今までの道のりを思い出しているのか遠い目をしているケイト。

「それで？これからどうするのだ？」

「俺達は街から脱出します。ニーナさんはどうしますか？」

「私ももうここに居る理由が無いしな。君達について行きたいんだが・・・。」

ニーナは途中で言葉を切ると皆の返答を待った。

健が3人を見るが特に反対するものはいなかった。それどころかダンにいたっては目で「賛成！！」と強く訴えていた。

「こっちも拒否する理由はありません。一緒に行きましょう。」

「・・・ありがとう。」

健の言葉に頭を下げて礼を言うニーナ。健は「いいですよ。」と返すと、レインに横っ腹をつねられた。

「・・・痛えぞ。」

「何で敬語なんだよ。」

何故か切れ気味のレインに戸惑う健。

「？年上に敬語使うのは普通だろ。」

そう言うとレインはつねっていた手を離した。健はなんだか良く分からず首を傾げていたが、聞くのもなんだと思い考えないことにした。

「次はとりあえずこのデパートに何か役立つものが無いか探そうぜ。」

「それなら任せてくれ。いい場所がある。」

ダンの提案にニーナが何かいい考えがあるようだ。一行はニーナを先頭に最上階の４階に向かうこととなった。

エスカレーターで４階に上がると、従業員らしきゾンビが３体歩いていた。

ニーナは無言だったが、下ろした手は爪が食い込むほどに握られていた。

「誰か、銃を貸してくれないか・・・？」

健は無言でニーナにデザートイーグルを渡す。ニーナはそれを構えると少しだけ涙を流し、餞別の言葉を告げると引き金を引いた。

「みんなご苦労だった、ゆっくり休んでくれ・・・。」

ドン！！ドン！！ドン！！

狙いは一発も外れることなく命中し、ゾンビ達は永遠の眠りについた。ニーナはしばらく完全に永眠した同僚達を見て静かに泣いていた。途中近くの死体にしゃがみこむと、ぽつりぽつりと言葉を漏らし始めた。

「すまない・・・。私がもっとしっかりしていれば・・・、私のせいで・・・・・。」

少しづつ漏れるニーナの後悔の念に、健は死体の目を閉ざしつつニーナに語りかける。

「・・・あなたが後悔するのは構わない。けど、自分のせいだと思うのは筋違いだ。彼らは精一杯生きて精一杯死んだんだ。」

健はそう言って立ち上がるとニーナの方を見て言う。

「あなたの言葉は彼らの死を侮辱してるんだ。自分のせいだと言って逃げるのはやめてください。」

「おい、言い過ぎなんじゃ・・・。」

ダンが健のあまりの言い草に口を出すが、本人は改める様子は無いようだ。

「フフ・・・、君は厳しいな・・・。」

「・・・こんな所で挫けてもらっちゃ困るんで。」

ニーナは健の不器用な優しさを見抜いていた。同僚が死んだのはニーナの責任では無いから、責任を感じる必要は無い。健はそう言

っていたのだ。
健は照れ隠しにぶっきらぼうに答えるとニーナに背を向けた。
「そうだな。彼らのためにも、こんな所でもたもたしているわけには行かないしな。さあ、先に進もう。」
ニーナが調子を取り戻すと再び一行は歩き出した。
少し歩くと一行はシャッターが下りている店の前に来た。
「ここだ。」
「シャッター閉まってんぞ・・・。」
レインの呆れた声にニーナは「まあ待て。」と告げるとポケットから鍵を出しシャッターの鍵を開けるとダンを呼んだ。
「すまないがシャッターを開けてくれないか？」
「分かりました！！！」
何故か気合の入りまくっているダンがシャッターを開けると、ニーナを除いた全員が中を見て驚いた。
「・・・ガンショップかよ・・・。」
「私知らなかったんですけど・・・。」
「当然だ。私が独断で開こうと数名のスタッフのみで極秘に準備していたんだからな。」

店の中にはさまざまな種類の銃が所狭しと並んでおり、幾つかの銃は置く場所が無いのか床に置かれていた。

「さあ、どうぞ持っていってくれ。開店初日の大出血サービスだ。」

「金とかはいいんですか？」

ダンの言葉に残念そうに首を振るニーナ。

「残念ながらもうこの店が開くことは金輪際ないからな。なら、有効活用した方がましだろう。」

「じゃ遠慮なく。」

レインが全く遠慮せずに店内に入ると全員で銃の選別会を始めた。

「私は何を使えばいいの？」

銃にあまり詳しくないケイトが健に尋ねる。

「ケイトはそうだな・・・、リボルバーの代わりにこいつを使えよ。」

健はそう言って1丁の銃を差し出す。

「グロック18C（9ミリ口径、装弾数31発）。レインのグロック17と似てるけどこっちはセミオート（引き金を引くごとに1発づつ）だけでなくフルオート（引き金を引き続けると連射できる）でも撃てるんだ。ショットガンは連射が利かないからこれでカバーできる。反動がきついから気をつけろ。」

「分かった。」

ケイトはグロック１８Ｃを受け取ると腰のホルスターへと入れる。

「お～～い、俺は～～～？」

次はダンの銃選びだった。健はまずショットガン用のスラグ弾を渡した。

「これは散弾みたいに小さい弾が複数飛ぶんじゃなくて一発のでかい弾が出るんだ。だから威力も反動も桁違いだから、間違っても生きた人間に当てるなよ？」

「・・・そんな弾いるのか？」

「何が出てくるかわかんねえしな。」

「・・・確かに。」

健は次にハンドガンを一丁手に取った。

「こいつはＭ９３Ｒ（９ミリ口径、装弾数２０＋１発）。引き金を引くごとに３発づつ発射される銃だ。」

「知ってる知ってる。ジョン・ウーが使ってた銃だろ？」

「・・・良く知ってんな。じゃあほれ、もう１丁。」

「お、分かってらっしゃる。」

かつて2丁拳銃で有名だった映画俳優の真似でダンは2丁のM93Rを装備することになった。

「次はレインかな・・・。」

そう思いレインを探すと、彼女はライフル銃のコーナーでなにやら考え込んでいた。

聞くと、彼女はコルトガバメントとグロック17は変えないが、他に何の銃を使うか悩んでいるらしい。

「丁度いいからケンが決めてくれないか？アタシじゃ決まりそうに無いからな。」

健は散々悩んだ末にG3A4を手に取った。

「弾は俺のM4より大型の7．62ミリ。装弾数20発でフルオートで撃てる。反動はでかいけど威力や射程もでかいからこういう状況では頼りになるはずだ。」

「へえ・・・。けど撃てっかな・・・。」

「なら試し撃ちでもしてこいよ。缶詰でも的にしてさ。」

「それいいな。」

「ついでにダンとケイトにもやらせといてくれ。」

「ん、了解。」

「さて、俺も見てみるか・・・。」

健は自分の使う銃を決めようとすると、カウンターの棚から何かを出しているニーナが視界に入った。

「何してるんですか？」

「ああ、君か。丁度いい、これは君に渡そうと思っていたんだ。」

そう言ってニーナは棚から出した物を見せた。

それは1丁の銃だった。だが、今までのどんな銃よりも異彩を放っていた。

「これ・・・。」

「M92FSをベースに銃身に延長パーツを付け、20発ロングマガジンを取り付けてある。だが最大の特徴は驚異的な速射性能だ。・・・これを作ったガンスミスは”セミオートでサブマシンガンの連射にライフルの精密性が再現できる”と言っていたよ。」

あまりの性能に絶句している健にニーナは銃を差し出す。

「これは君のものだ。」

「・・・・・有難く使わせてもらいます。」

健は銃を受け取ると構えたりホルスターから抜いてみたりする。

銃の重心バランス、グリップの握り心地、全てが丁度良く思わずにやけてしまうほどだった。

「ああそうだ。その銃には名前がついてるんだった。」

「名前、ですか？」

「ああ。確かﾞシャープエッジﾞだったな・・・。」

「へえ・・・。」

その後、全員が弾薬や医療品、食料などの配分をしている内に外は宵闇に包まれていた。

「うわ、真っ暗じゃん。」

「これじゃ移動すんのは危険過ぎんな・・・。」

「ここで一晩明かすしかないな・・・。」

暗闇で視界が悪いため、夜間での行動は危険と判断され、一行はデパートで一夜を明かすことになった。

第6話：ガンショップ（後書き）

次回も戦闘シーンは無しの予定です。

第7話：休憩室での会話（前書き）

女心が分かりません・・・。（泣）

第７話：休憩室での会話

休憩室にて一晩を明かすことになった一行だが、いつ何が起こるか分からないので、誰かが見張りをすることになった。

健は最初に見張りをすると言ったが、全員からの反対を受け（絶対に朝まで粘るので）、最初に休むことになった。見張りは男女に別れて行うことになり、休憩室の奥の仮眠室でダンと健が先に休んでいた。

今この場に居るのは、床に二丁のＨ＆ＫＵＳＰ（４５口径モデル、装弾数１２＋１発）とＧ３６Ｃ（５．５６ミリライフル弾使用、装弾数３０発）を置いて点検しているニーナと時々仮眠室に行って健が休んでいるか確認しているケイト（レインは一度健が起きていた時に強引に眠らしたため彼女に代わった）、窓から外を見ているレインがいた。

「・・・・・静かですね。」

ケイトが沈黙に耐え切れなくなったのかぼそりと呟く。ニーナは点検を終えたのかＵＳＰを両側のショルダーホルスターに入れる。

「確かにそうだな。外の様子は？」

ニーナが話しかけるとレインは窓から視線をはずした。

「外は大分大人しいぜ。大してうろついてないしな。」

「そうか・・・。」

ニーナは全員に渡し自分も着ていたタクティカルベストの内ポケ

ットから煙草を取り出すと火を点けようとしたがレインがじと目で睨んでいたので、火は点けずに銜えた。

「・・・だめか？」

「レインは煙草嫌いなんです・・・。」

「むう、吸わないと落ちつかないんだが。」

「話でもして紛らわせてろ。」

「ああそうだ。二人に聞きたいことがあるんだが。」

「？何ですか？」

ケイトが部屋にあるコーヒーメーカーでコーヒーを入れて二人に渡していた。ケイトは自分の分も入れると床に座りニーナの話を聞こうとした。

「単刀直入に言う。健のことは好きか？」

ブーーーーーー！！！

ケイトとレインは口に含んでいたコーヒーを噴き出した。

「げほっ、いきなり何を・・・！」

レインがニーナに文句を言おうとしたが、ニーナの目が真剣だったために二の句が告げなかった。

「彼は仲間のためなら死をも恐れない。それは分かってるだろう？」

黙って頷く二人。まだ知り合って1日も経ってないが彼がどんな人物かは大体は分かってきていた。

「だが、彼は私達が思っているほど強いわけではない。きっと、弱音を吐きたくてしょうがないんだろう。けれど、彼はそれを良しとしないから絶対言わないだろう。そんな彼を、2人は支えられるか？」

ニーナの重い言葉にただ黙っているしかできない二人。

「・・・・アンタはどうなんだよ。」

先程からやられっぱなしのレインが反撃を試みるが、ニーナは微笑を浮かべて答える。

「私は彼が気に入ったからな。私にできることは何でもするさ。・・・借りもあるしな。」

あっさりと言い返されてしまった。

「君達は？彼に頼ってるだけなのか？」

ニーナが意地悪そうな笑みを浮かべて言い寄る。レインは顔を赤くしてしどろもどろになっている。彼女もここで言うべきことはわかっているし、それが嫌という訳ではない。だが、妙な気恥ずかしさがそれを告げるのを妨害していた。

だがなんとかそれを告げることができた。

「あ、アタシは、アイツを失くしたくないとは思ってる・・・。だから、出来るだけ支えてやりたいとは思ってる・・。」

顔を真っ赤にしながら答えるレインにニーナは満足そうに頷くと、ケイトの方を向いた。

「君は？」

「私は、もう、骨抜きにされちゃってますから・・・。」

ケイトは頬を柔らかく染め、はにかむような笑みを浮かべた。2人の答えに満足したらしく、ニーナはしきりに頷いている。

「うむ、よろしい。よかったな健。」

「！！」

レインが物凄い早さで後ろを振り向くが、健はいなかった。

「・・・・・・（怒）」

「ハハハ、引っかかったな。」

テメエ！！レインが顔を真っ赤にして怒り、ニーナに殴りかかるが、ニーナは部屋を逃げ回るので中々捕まらない。そんな2人を見て笑うケイト。

少しの間3人は状況も忘れてまるで親しい友人のようにはしゃいでいた。しばらくするとニーナはレインに謝り、なんとか収まりを見せた。

すると仮眠室から寝ぼけ眼の健が出てきた。

「どうしたの？まだ交代には早いけど？」

「いや、なんか胸騒ぎがしてな・・・。あれ、レイン、何でそんな息切らしてんだ？」

「・・・・・・気にすんな。」

健が首を傾げていると、突然窓の外から轟音が響いた。

第8話：U．B．C．S（前書き）

今回も新キャラの登場があります。

第8話：U．B．C．S

突然の轟音に仮眠室で寝ているダン以外の４人はすぐに窓へと近寄る。外では近くの建物にぶつかってとまっている1台のジープがあった。ジープからは特殊部隊風の服を着た2人の人間が出てきたが、近くには既にゾンビが集まってきていた。

「どうするの？」

ケイトは半ば予想しつつ尋ねた。健は瞬時に寝ぼけまなこを直すと、ケイトの予想通りの行動をしていく。

「俺とニーナ、レインは裏口を開けて彼らを誘導。ケイトはダンを叩き起こしてから合流して裏口の安全確保を頼む。」

「分かったわ。」

そう言ってケイトは仮眠室に向かう。健達は急いで裏口へ向かい、バリケードをはずして外へ向かうが、健はレインとニーナをその場に残す。

「ケイト達が来るまでここを頼む。」

「・・・了解。」

「了解した。」

健は外に出るとすぐに近づいてきたゾンビ４体にシャープエッジを構える。

「こいつを試すか・・・。」

左腕一本でシャープエッジを構えると、躊躇わず引き金を引いた。

バンバンバンバン！！！　うああ・・・。　ドサドサドサドサ！

シャープエッジは脅威的な速射と精密射撃でゾンビ４体をまとめて葬る。前評判どおりの凄まじい性能に頼もしさを感じると周囲のゾンビを始末しつつジープの方に向かう。向こうも気づいたらしく、ゾンビを相手しつつこちらを向く。

「おい、こっちだ！！」

「！？　誰だお前！？」

ゾンビと戦っていた２人の男の方が警戒心を剥き出しにして怒鳴る。健は段々と多くなっているゾンビの数に辟易しつつ怒鳴り返す。

「んなこたいいから早くしろ！！それともここでコイツらの仲間になるか！？」

その一言で男は何も言えなくなった。もう一人の女の方は弾が尽きたのか持っていたアサルトライフルを投げ捨て、健の方に近寄ってきた。

「・・・どこに行くの？」

「そこのデパート！！仲間と一緒に立て篭もってる！！」

「分かった。」

「ちょっ、待てよライン！！」

ラインと呼ばれた女性が健と共に走りだし、ノルと呼ばれた男性が慌ててついていく。

ゾンビ達が3人を逃すまいと周囲を囲もうとするが、健がデザートイーグルとシャープエッジの2丁拳銃で文字通り血路を開いていき反対側では外に出て来ていたレインとニーナの援護が行われ、ゾンビの囲いは突破された。

「急いでください！！」

「オラオラどんどんきやがれ！！」

裏口ではダンとケイトが近づくゾンビを蹴散らしていた。全員はなだれこむように入ると、男性陣がバリケードを作り直し、完成するとようやく助けられた2人が口を開いた。

「すまねえ、さっきは酷ぇこと言っちまって・・・。」

「助かったんだし、別に構わねえって。」

「ありがとよ。俺はノル・エンディ。こっちはエル・ラインハートっつうんだ。」

「・・・どうも。」

「ああ、こいつはラインって呼んでくれ。でないと反応してくれないからな。」

「・・・めんどい奴だな。」

レインの呆れた口調にもラインは反応せず、先程使っていたハンドガンＳＩＧＰＲＯＳＰ２００９（９ミリ口径、装弾数１５＋１発）の点検をしている。

「無口な奴だが強いし必要なことは言うから大丈夫だ。」

ノルが困ったように苦笑しつつフォローを入れる。するとニーナが少し真剣な目つきをしてノルにあることを尋ねる。

「ところで、君達は何者だ？　見たところどこかの特殊部隊のようだが、軍隊にしては装備が違うしな。」

「・・・中で話す。」

一行は４階のガンショップで装備を整えるついでに話をすることになった。

ノルは自分の銃のＳＧ５５２（５．５６ミリライフル弾使用、装弾数３０発。銃身下部にフォアグリップ付き）の空マガジンに弾を込めつつ話をする。

「俺達はＵ．Ｂ．Ｃ．Ｓと言う部隊に所属していた。だがヘリでの降下直後にゾンビの大群に襲撃されて部隊は全滅、俺達はなんとか降下場所にあったジープに乗って逃げ、そこで事故っちまった訳だ。」

「Ｕ．Ｂ．Ｃ．Ｓ？」

ダンが？を浮かべる。

「”アンブレラバイオハザード対策部隊”の略だ。」

「アンブレラ？　どうして製薬会社が出てくるんですか？」

ケイトが先程のダンと同じ様に？を浮かべる。この街にかなりの影響力を持つとは聞いていたが、何故部隊を保有していたのか。

「さあな。俺達は元々死刑囚や終身刑だったヤツがアンブレラに釈放や恩赦と引き換えに連中に雇われてるんだ。たいしたことは知らされてねえよ・・・。」

「・・・私達は使い捨てのコマ。」

それまで口を聞かなかったラインが突然口を開き、意味深な言葉を呟く。

「何だそれ？」

「雇い主のアンブレラは人でなしのクソッタレどもだってことさ。しかし、成る程、そう言う事か・・・。」

話を聞き終わると健はある事実に辿り着きしきりに頷いていた。

「何が成る程なんだ？」

「アンブレラはこの事件に関わってる。最悪、連中がこれを引き起こしたって可能性もある。」

「！」

健のとんでもない発言に驚愕する一同。ニーナとケイトは納得したようだが、レインとダンはまだ納得がいかないようだ。

「ちょっと待てよ、何でそうなんだよ。」

「・・・お前ら、バイオハザードの意味知ってるか？」

突然の健の謎かけに怪訝な表情を浮かべつつレインが答える（ダンは分からないため答えなかった）。

「確か、”生物災害”だったっけ？」

「まさにこの状況がそうじゃねえか？　何でわざわざ部隊名にそんなのが使われてる？　まるでこの状況が予想できてたみてえじゃねえか。」

「あ・・・。」

そこまで言われてようやくレインとダンは気づく。ノルが健の考えをさらに補足していく。

「俺らは一般市民の救助を主任務としてたが、アンブレラの社員を助けたらボーナスが入るって言われたぜ。」

「ふん、素敵な話だ。」

ニーナが不機嫌そうに呟く。

「ああ、だが悪いことだけじゃねえ。ノル、聞きたいことあんだけど。」

「何だ？」

「救助ヘリはいつ来るんだ？」

「え！？そんなのがあるの！？」

ケイトが驚く。健はさも当然のことのように話していく。

「市民の救助をしてるってことは少なくとも助ける気はあるんだろ。なら、ヘリで来る可能性が高い。どうだ？」

「確かにあるが、今となっちゃ来るかどうかも怪しいぜ？」

「徒歩で行くよりはいいだろ。みんなは？」

健が全員の意見を聞いていく。だがそれは聞く必要の無いことだった。

「ここまで来たんだ。アタシはケンについてく。」

「私も彼を信じます。」

「いや、そこまで言わなくても・・・。」

ケイトの真剣な様子に困る健。

「私もだ。私を傷物にした責任は取ってもらわないとな。」

「俺覚えねえぞ！？」

思わず突っ込みを入れる健に全員が爆笑。ラインですら「・・ぷっ。」と微かに笑っていた。

「俺もだ。何だかんだで一番頼りになっからな。」

「・・・自分が役立たずって言ってる。」

「ぐはあ！！！」

ラインの強烈な毒を食らいダンは倒れた。レインが起こそうとするが、よっぽど効いたらしく、泣きながら起きようとしない。

「・・・いい仲間じゃねえか・・。」

「そうだな。お前が笑いを堪えてなければ決まったんだがな・・・。」

健が必死で笑いを堪えているノルに白い目を向ける。よっぽどウケたのか肩が震えており、顔には堪えきれない笑みが浮かんでいた。

「ラインは？」

先程からＭ５００（５０口径リボルバー、装弾数５発）とステアーＡＵＧ（５．５６ミリライフル弾使用、装弾数３０発）を装備していたラインに健が尋ねると、ラインは健をしばらく見つめた後に答えた。

「・・・あなたは、信じれそう・・・。」

それだけ言うと次は右太腿に差していたアーミーナイフの手入れを始める。健はそれを了承と受け取るとようやく笑うのをやめたノルへと顔を向けた。

「大丈夫みたいだが？」

「わあったよ、皆でとっととおさらばするか。ヘリの着陸場所はここから少し行ったラクーン市立図書館で、今から・・・４時間後だ。」

「じゃ、早めに行ってまってようぜ。」

「そうだな。ついて来てくれ、いい車がある。」

こうして一行はようやく脱出への糸口を見つけ出した。しかし、そこには獲物を待ち受けるモノがいた。

果たして健達は街から脱出することが出来るのだろうか・・・。

第9話：図書館へ（前書き）

今回は短いです。

第9話：図書館へ

一行はデパートの地下駐車場に来ていた。救助ヘリの来る図書館に向かうのに徒歩では危険が大きいためだ。

地下駐車場にはゾンビもおらず一行は何事もなく進んでいった。しばらく進むと先頭を歩いていたニーナが一台の車の前で立ち止まった。

「この車だ。乗ってくれ。」

「これって・・・。」

それは巨大なトレーラーだった。ニーナが鍵を開け、スライド式のドアを開けると、中には机やテレビ、キッチンや奥にはトイレやシャワー室までついていた。

「どっから手に入れたんだこんなモン・・・。」

レインが中を見て呆然と呟くと、ニーナは苦笑を浮かべて答える。

「これは私のではないぞ。知り合いに揉め事を起こしたので預かっていてほしいと頼まれたのだ。」

「・・・その友人とは縁切った方がいいぞ・・・。」

ノルが机の棚から白い粉が入った袋を見つけていた。健は無言で窓を開けると、ノルがさまざまな所に隠されていた白い粉を見つけて捨てていく。アスファルトに白い粉がぶちまけられていくのを無視して健がいくつか心配事を確認していく。

「事故車とかにぶつかっても大丈夫か？」

「・・・前面のフレームが換えられてる。多分大丈夫。」

外で車のチェックをしていたラインがフレームに触りつつ親指を立てる。

「スピードは？」

「８０ｋｍは余裕で出せたはずだ。」

「もう粉は無いな？」

「・・・多分。」

一番の心配事に曖昧な返事をされた。

ノルは家捜しを始めた健をレイン達に止めさせつつ運転席に座りエンジンをかけ、車を発進させる。

一人外にいたラインは地下駐車場の出入口に来ていた。出入口にはシャッターが下りており、ラインはどこかに操作盤か何かないか探し、事務所らしき所を見つける。中に入るとシャッターの操作盤があり、ラインは操作盤を操作してシャッターを開けた。シャッターの前にはゾンビが何匹かうろついており、シャッターが開くと中に入ってくる。

ラインがＡＵＧを構えようとするが、そこにトレーラーが到着した。

「ライン、乗れ！！」

健がトレーラーのドアを開けラインを急かすとラインが銃を下ろして車に乗り、車が猛スピードで出入口へ向かう。

「何かにつかまってろお！！！」

「きゃあ！！」

トレーラーにゾンビがぶつかって車内に振動が伝わり、ケイトが悲鳴を上げる。車は地下駐車場から出ると放置自動車やゾンビをはじき飛ばしつつ走っていく。

「これで図書館に着けば脱出できるな・・・。」

「ようやくだな・・・。」

ニーナとダンが感慨深げに呟く。この地獄が始まって1日足らず、ようやく訪れた脱出のチャンスに自然と車内の空気も期待に高まる。だが健はその空気を抑える。

「まだ脱出しちゃいねえんだ。気抜くには早えぞ。」

「健の言うとおり。」

健の言葉にラインが同意する。

「戦場で一番危険なのは助かると思って気を抜いた時。どうしても対処が遅れて周りにも被害が出る。」

”周りにも”の部分を強調するラインに気が緩んでいた面々も気を引き締める。

「2人の言うとおりだ。まだまだ先はあるんだ。最後まで油断せずに行こうぜ。」

ノルが話をまとめると一同は気持ちを引き締め図書館へと向かった。

第9話：図書館へ（後書き）

次はB．O．Wとの戦闘を出してみようかと思います。

第１０話：奈落への道

一行は道路にうろついていたゾンビを蹴散らしつつ図書館にたどり着いた。図書館の周りにはゾンビがおらず周囲は不気味な静けさに包まれていた。

ノルは腕時計を確かめまだ時間には早いことを告げる。

「まだ時間があるぜ。」

「図書館の中で待とうよ。外よりは安全だろうから。」

図書館に来たことがあると言うケイトとダンとレインの3人を先頭に図書館の中へと入っていく。扉を開けると受付に1体のゾンビが立っていた。先頭の3人はそのゾンビを見て顔を曇らせる。健はそのゾンビが3人の知り合いだと気づく。

「・・・知ってる人か？」

「ここの職員で、よく面白い本を紹介してもらってた。とても良い人で、こんな目に合うべき人じゃなかった・・・！」

ダンが耐え切れなくなったのか、嗚咽を漏らし始める。健が静かに銃口を上げるがレインがそれを止めてコルトガバメントを構える。

「アタシ達が世話になったんだ。アタシ達がやるよ。」

「・・・分かった。」

ドン！！

レインのコルトが火を噴く。ゾンビは頭を撃ち抜かれ絶命した。ケイトは近くにあった植木鉢の花を死体に供え黙祷をする。すすり

泣いているダンを除いた面々はケイトと同じく黙祷をし、健は手を合わせていた。

「・・・行こうぜ。」

しばらくしてノルが言うとケイト達3人は頷いて立ち上がり、図書館の探索を再開する。3人の顔は吹っ切れたかのようにすっきりとしていた。

それからしばらくはたまにゾンビに会う程度だったが、一階の図書室を通り過ぎようとした時中を見たノルが「ん？」と妙な物を見つける。

「？どうしたノル？」

「いやあれ・・・。」

ノルが指差した先には白衣を着た男が死んでおり、どう見ても図書館にいるには不自然だった。健とラインが死体を調べると男はアンブレラの科学者のようだった。

「何でアンブレラの科学者がここで死んでんだよ。」

「さあな、どうやらゾンビにやられたんじゃないようだしな。」

科学者の首は切り裂かれており、この傷から出血多量で死んだようだった。

「これはあの時のバケモノか？」

「いや、それならゾンビ化するはずなのにこの死体はなってない。また別のバケモンの可能性があるな・・・。」

ニーナがデパートで襲ってきた化け物を予想するが、健はそれを

否定する。

「一体何がいんだよここ・・・。」

「まるでお化け屋敷だな。」

「命の危険のあるお化け屋敷なんてやだよアタシは・・・。」

「とりあえずこの部屋を調べてみよう。何かあるのかもしれない。」

ノルの提案によりこの部屋を調べることになった。全員はそれぞれバラバラに散り、健は入り口から離れた所にある本棚を調べていく。

（あの男、何故ここにいた？　避難？いや、避難なら警察へと向かうはず。なら何故？ここでないといけない理由があったのか？）

健が考え事をしつつ本棚を調べていると床に不自然な影が落ちている場所があった。健は何気無く目線を上げると、即座にＭ４を構えた。

影の正体は本棚の上にいた化け物だった。二本足で立っているそれは緑色のごつい肌をしており、猫背の体は筋骨隆々としていて手足には鉈のような鋭利な一本の爪が付いていた。

そいつは爬虫類のような目を健に向けており、健もその目を見返していたが、化け物から発せられる殺気のような物が今までのものとは段違いだった。

（こいつ、かなり手強いか・・・。他の皆は大丈夫か・・・？）

健が冷静に頭の中で作戦を練っていると、化け物が突然叫び声を上げて跳躍した。

キシャアアア・・・！！

（早っ！！！）　ガガガガ！！！

化け物の予想外の速さに驚きつつＭ４を連射する。化け物は胴体に３発のライフル弾を食らい床に落ちる。健は落下地点から距離をとると油断なく化け物へ銃を向ける。

すると化け物は怪我を気にした様子もなく立ち上がり威嚇の声を上げる。健は即座に撃とうとしたが化け物は体を低くしてこちらに向かってきた。

「ちいい！！」

健はＭ４を撃ちつつ後ろへと下がるが向こうのスピードの方が早く、発射される弾丸もかするだけだった。化け物は再び跳躍すると本棚に足を掛けさらに健の頭上へと上がり鉤爪を構える。少しの判断ミスで生死が別れる状況で健は前へ転がることを選択した。

化け物の鉤爪は空を切り、しっかりと着地した化け物は獲物の姿を捉えようと後ろを向く。

そこには、体は倒れたまま腰のデザートイーグルを抜いて構えている健の姿があった。健は間髪いれずに引き金を引く。

ドン！！！

化け物は頭部に３５７マグナム弾を食らい絶命した。健はデザートイーグルをホルスターに仕舞い立ち上がる。その時、前方にある壁に接した本棚を見て首を傾げる。

「どうしたの・・・って何それ・・・。」

「多分科学者を殺った奴だ。今までの化け物とはレベルが段違いだったぜ・・・。」

いつの間にかラインが駆けつけており、化け物の死体を見て絶句している。健は戦闘の感想を呟くと本棚へと向かい、本棚の下を見てしゃがみ込む。

「・・・どうしたの？」
「ここを見てくれ。」

健は本棚の角を指差す。床には切れ目が入っており、丁度本棚一つの横の長さと同じだった。本棚には聖書がいくつも入っており、健はその一つを手に取る。パラパラとページをめくっていくとある文章に線が引いてあった。

＜汝、隣人を愛せ＞
「？何だコリャ？なんかの暗号か？」
「・・・皆を呼んで一緒に考えたら？」
「そうすっか・・・。」

二人は手分けして皆を集め、再度怪しい本棚の前に集まっていた。

「何だこの暗号？隣人を愛せ？」
「どういう意味だ？」
「本棚の前でキスとかしろってのか？」
「それレインがやりたいだけじゃ・・・。」
「ち、ちがっ、アタシはべ、別に・・・。」
「バカいってないで真剣に考えろ。」
「・・・。」
「隣人・・・隣・・・本棚の隣・・・。」

真剣にやってない４人をノルが叱り、健がぶつぶつと呟きながら、ラインが無言のままそれぞれ左右の本棚を調べる。と、健が右の本

棚にカードリーダーらしき物を見つける。

「ビンゴ。」

「益々怪しいな。だがカードか・・・。」

「あの科学者が何か持ってたんじゃ・・・。」

「・・・これ？」

ラインがポケットからカードキーを取り出す。カードには＜ラボカードキー＞と書かれていた。

「さっきの死体から取っといたのか・・・。」

「何かに使うと思って・・・。」

「グッジョブライン。」

ノルが呆れ、健が親指を立てて褒める。ラインは恥ずかしそうに笑みを浮かべるとカードキーをカードリーダーに差し込む。すると、本棚が床に沈んでいき奥に隠されていたエレベーターが露わになった。扉にはアンブレラのマークが描かれていた。

「やはりアンブレラか・・・。」

「さて皆、どうする？」

「どうするって・・・。」

「ここからは完全に余計なアクションだ。生きて脱出したのなら、ここでヘリが来るのを待てばいい。別に余計なことをして命を危険にさらすことは無いぞ？」

健が全員に尋ねる。自分達は生き残るためにここに来たから、わざわざ危険なことをする必要は無いと、彼は言っているのだ。

一番最初に答えを出したのはレインだった。

「はっ、余計？　アタシはそうは思わないね。アタシ達はこの事件を引き起こした奴らに絶対に報いを受けさせなきゃならないんだ。なら、この行動だって余計な筈は無いよ。」

そう言ってレインはエレベーターを開け中に入る。

「私も、この街をこんな風にした人達を許さない。」

「俺もだ。」

続けてケイトとダンも入っていく。

「私はやられっぱなしなのは性に合わないしな。」

「やれやれ、世話が焼ける。」

ニーナとノルも入っていく。エレベーターに入ってないのは健とラインの2人だけになった。

「ラインはどうすんだ？」

「・・・私は、あなたを信じてみる。だから、あなたについてく。」

「・・・なんで俺を？」

健の疑問にラインは彼の顔を見て独白していく。

「私は昔から人の心が少しだけ分かった。その所為で他人がどんなに信用できない物か分かった。でも、あなたは違った。あなたは私が初めて信じていいと思えるような、そんな心の持ち主だった。・・・だからあなたを信じる。」

ラインの言葉を聞き終ると健は彼女の手を引き、エレベーターに向かう。

「俺は自分の正義を貫くために行くぜ。」

そう言うと健はラインと一緒に乗り、最後に確認を取る。

「Ａｒｅ　Ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ？（覚悟はいいか？）」

『ＯＫ！！』

全員が不適な笑みを浮かべ勢い良く返事を返すと、健は同じような笑みを浮かべエレベーターのボタンを押した。

扉が閉まるとエレベーターは奈落の底へと降りていった。

第１０話：奈落への道（後書き）

いよいよ物語も終盤に近づいてきました。もう少しだけお付き合い下さい。

第１１話：深遠の狩人（前書き）

いよいよ終盤に差し掛かりました。

第１１話：深遠の狩人

エレベーターが開くと健とノルが飛び出し周囲の安全を確認する。

「クリア！」

「こっちもクリア。」

２人が確認を終えると残りの面々も出てくる。いずれも地下にある巨大な施設に驚愕の表情を浮かべている。

「何で街の地下にこんなんが・・・。」

「どうやって作ったのかしら・・・。」

ダンとケイトが呆然と呟く。

「ここも安全では無い様だな・・・。」

ニーナが通路に倒れている死体に顔をしかめる。死体は図書館に出た化け物にやられたらしく首を切断されていた。だが誰も悲鳴を上げたりはしない。そうするには彼らは既に「死」に対する経験を積み過ぎていた。

ノルが死体を調べると日記を発見した。中にはこう書かれていた。

９月１５日

今日はこの街にあるもう一つの研究所で新しいウイルスの実験が行われるらしい。ジャックの馬鹿はそのウイルスを分けてもらうなんて考えてる。まったく、そんなこと無理に決まってんのに・・・。

９月１７日

ジャックの奴、やけに機嫌がいい。まさか、本当に新型のウイルスを手に入れたのか？　まさかな・・・。

９月１８日
ジャックの奴、ゲリーの爺さんの所に何度か行ってやがった。あの爺さんは対Ｂ．Ｏ．Ｗ用の武器を作るのを専門にしてんのに、一体何のようだ？

月　日
街にバイオハザードの危険が出たらしい。何でも新型ウイルスの揉め事が原因らしいがジャックの奴が「早く街から出ないと！！」と慌てていた。ここにいりゃ直に救助が来るのに何を慌ててんだ？

月　日
何てこった。ハンターｅ（イー）が逃げ出した。お陰で研究所内でバイオハザードが発生しちまうし、ジャックの言う通りにしとくべきだった。ジャックはさっき俺を庇って死んじまったし、これからどうすりゃいいんだ・・・。

日記はここで終わっていた。ノルは読み終わると日記を元に戻した。

「・・・やっぱアンブレラの仕業だったのか・・・。」
「くそ！　こんなことの所為で俺達の街が・・・！！」

ダンが壁に拳を打ちつける。この街に住んでいた人は似たような心境のようだった。健は死体に手を合わせると今後の行動をまとめる。

「これから中を探索するぞ。実験データや記録とかを探すんだ。後

で証拠として使えるかもしれない。」

一行は研究施設の探索を始めた。しばらく歩いているとT字路に差し掛かったが、右の道から金切り声のようなものがした。健はその声が図書館で戦った化け物の声と同じなのに気づいた。

「この声、図書館のと同じだ・・・。」

「じゃ、あの化け物がハンターeか・・・。」

「気をつけろ、かなり手強い。特にスピードはかなりのモンだ。」

戦闘力がある健とノルに、接近されたときの為にダンが前衛になり、先へと進んでいく。右の道には予想通りハンターがいた。ただ、数は1体ではなく3体おり、それぞれ威嚇の声を上げていた。

前の3人は躊躇うことなく引き金を引いた。2体のハンターが5.56ミリ弾を連続で頭部に食らい、後頭部から血と脳漿を撒き散らして絶命し、もう一体もダンのスラグ弾で頭を吹き飛ばされた。

「確かにこりゃ油断すると死ぬな・・・。」

「あと何匹いんだよこいつ等・・・。」

レインがうんざりしたように愚痴る。

「何匹いようが進むしかないぞ。私達は自分でそう決めたんだからな。」

「ニーナの言う通りよ。何匹来ようとも全部倒すしかないわ。」

2人の言うことに全員が頷くと、一行はさらに先へと進んでいく。何度かハンターと交戦をしたが全て撃退し、進んでいると「警備室」と書かれた部屋を見つけた。

中に入ると研究所の様々な所に設置してある監視カメラの映像が

目に入った。機械に強いノルとケイトがカメラを見て、残りは休むことになった。
各々が銃の点検をしたり仮眠を取ったりしていると健が不意にあることに思い当たる。

「・・・いないな。」
「？　何がだ？」
「ゾンビだよ。ここでもバイオハザードがあったのなら1体くらいいる筈だ。」
「あ・・・。」

ここに来る途中でゾンビに会うことはなかった。なら、ここの研究員は一体どこに行ったのか？
健がその事について考えようとした時ノルが「おい！！」と皆を呼ぶ。ノルは1台のカメラを指差しており、そのカメラにはとんでもない物が写っていた。

「何だよこれ・・・。」

ダンが呆然としている。カメラにはどこかの通路を歩いている大男が写っていた。
大男は両手に爪を生やしており歩きながら爪を出し入れしていた。体には何も着ておらず、目には光がなく、どこか人形のような感じを受けた。大男の前方からハンターが現れる。ハンターは金切り声を上げて大男に飛び掛る。大男が無造作に左手を振るとハンターは壁に勢いよく叩きつけられた。ハンターは今の一撃で頭部を破壊されており、壁に血の跡を残しつつ床に倒れた。大男はそれを気にするでもなく先に進んでいく。
カメラを見ていた全員がこれは今までの敵とは比べ物にならない敵になると確信していた。

「こいつが居る場所はどこだ？」
「え？　えっと・・・、ここから2階下の北東よ。」

今まで呆然としていたケイトが健に呼ばれて我に返ると部屋のパソコンを操作して居場所を調べる。「地下3階」と書かれたマップが表示され、「実験室」と書かれた部屋の近くで大男はうろついていた。

「実験室ねえ・・・。あの大男、もしかしてここで作られた化け物なんじゃ・・・。」
「多分そうだろうな。ま、敵だっつーのに変わりはねえけどな。」
「それで、こいつはどうする？」
「別に戦う必要は無いんだ。何とかやり過ごそう・・・。」
「ねえちょっと！！」

大男を監視していたケイトが悲鳴じみた声を上げる。

「どうした！」
「これ見て！」

カメラには通路を疾走する大男が写っていた。

「そんなどうして！？」
「こっちに向かってんのか！？」
「何でここにいるのがわかんだよ！！」
「知るか！！全員こっから逃げるぞ！！」
「賛成だ！！」

一行は地下から昇ってくる脅威を感じ取りエレベーターへと戻っ

ていく。

ゴガア！！！！

しばらく走ると、突然床が割れ、下から大男が現れた。

「ウソだろ・・・。」

「床を破るとはな・・・。非常識にも程があるぞ。」

「仕方ねえ、戦うぞ。」

「か、勝てんのか、コイツ・・・。」

ダンが不安そうに銃を構える。他の面子も似たような心境だった。

こんな規格外の化け物に勝てるのか・・・？　そんな状況にも諦めない者もいた。

「バーカ、こんな木偶の坊にアタシらが負けるかよ。」

「俺達は必ず生き残るんだ。こんな所で死ねるかよ。」

レインと健は不適な笑みを浮かべると大男へ銃を向ける。２人の全く恐れを見せない姿勢に他の者も消えかかっていた闘志をかき集める。

「そうだな、こんな所では死ねないな。」

「ったく、俺がガキに励まされるなんてな。」

「早くやっつけて終わりにしましょう。」

「・・・賛成。」

「オラア来いやあ！！！　俺様が引導を渡してやるぜ！！！」

全員は大男に向かって銃を向ける。大男も両手を交差させると、左右に思い切り振り準備完了とでも言うかのようだった。

「上等だ。皆、絶対生き残るぞ！！」
『おお！！！！』

こうして強き意志を持つ人間達対人間の作り上げた化け物の、生き残りを掛けた戦いが始まった・・・。

研究所のある場所にて、それを見ている一人の人間がいた。

「くくく・・・、そうだ、戦え・・・。私の最高傑作の性能を見せてくれ・・・。」

不気味な狂笑を漏らしつつそいつは戦いを見続ける。

限りなく絶望的な状況の中、それでも生き残った者達はあがき続ける。その先にあるのは希望か、絶望か・・・・・。

第１１話：深遠の狩人（後書き）

次回からは戦闘シーンが続きます。
・・・しばらく目が痛くなるな～～～。

第１２話：死闘（前書き）

今回は健がピンチに陥ります。

第１２話：死闘

ガガガガガガガガ！！！！　ドゴンドゴンドゴン！！！

白一色の通路に大量の空薬莢と赤い血が舞う。通路にはいくつもの銃声と怒号、そして地の底から響くような低い声が響いていた。

「くそ！　全然効いてねえぞ！！」
「いいから撃て！！」
「突っ込んでくるぞ！！」
「避けろ！！」

全員が左右に転がるとその間を灰色の弾丸が通り過ぎていく。
大男の突進を何とか回避して健達は銃撃を再開する。先程から何百発と食らわせているが、一向に攻撃の手が緩められることは無く、むしろ健達の弾薬の方が危機に陥っていた。

「だめだ！！　これじゃじり損だ！！」
「どうする！？　手持ちの武器じゃ倒せないようだぞ！！」
「一旦二手に分かれよう！！」

ノルが走りつつ後ろから追いかけてきている大男の膝に銃弾を叩き込む。大男は片方の膝を破壊され床に倒れる。その間に大男との距離をとる。

「さすがノル！！」
「そんで二手に分かれるって！？」

レインがＧ３Ａ４のマガジンを換えつつノルに尋ねる。

「一つは警備室に戻って打開策を考える班。もう一つはアイツを引きつける班だ。」
「囮作戦かよ！！」
「仕方ない。何か作戦を考えるにも時間が必要だ。」

ニーナが傷が回復して追いかけてきた大男の頭部にＧ３６Ｃを連射した。大男は銃弾が当たっても痛がることは無かったが視覚は潰されたのかその場で顔を抑えて立ち止まる。

「その作戦で行くにしても、どう分かれるんだ？」
「囮組は健、ラインの二人で・・・。」
「俺も行くぜ！！」
「私も行こう。あまり知略の働く方ではないからな。」

ダンとニーナが囮組に名乗りを上げる。
こうして一行はノル、ケイト、レインの３人の作戦立案組と健、ダン、ライン、ニーナの４人の囮組に分かれることになった。
作戦立案組は大男が悶えている隙に警備室へと向かう。

「ケン、無茶すんなよ・・・。」
「死んじゃだめだよ・・・、絶対・・・。」

レインとケイトが心配そうに呟く。健は二人の頭を叩くと優しげな笑みを浮かべた。

「心配すんな、俺はいっつも無事だったろ？　ちゃんと戻るから、そっちもしっかり頼むぜ？」
「・・・任せろ、ぜってえあの筋肉男を倒す方法を見つけてやるぜ。」

「頼りにしてるぞ。」
「オイ健。こいつを持っとけ。」
ノルが長方形の箱型の物を投げる。
「無線機だ。使い方はラインに聞け。」
「分かった。」
「それじゃ、そろそろ俺達は行くぜ。」
「おう、なるべく早くな。」
「・・・善処する・・・。」

ノル達が警備室に向かうと、大男もようやく視力が回復したらしく、生気の感じられない目をこちらに向けてくる。

「皆、ここが正念場だ。気引き締めて行くぞ。」
「・・・分かった。」
「おっしゃあああ！！！来いやあああああああ！！！！！」
「来い、人間の強さを見せてやる・・・！」

健達はそれぞれの銃を構えると作戦立案組とは別の通路に走っていく。大男が歩きだすと同時に４つの銃口から弾が発射される。
銃声が第２ラウンドのゴングとなった。

作戦班は警備室の前に着くとドアを蹴破って中に入っていく。ノル達は中が安全なのを確認すると急いで自分達の仕事に取り掛かる。
「レイン、カメラを見てろ。何か変わったことがあったら言うんだ。ケイトは地図を調べろ。対Ｂ．Ｏ．Ｗ用の部屋がわかるかもしれな

い。」
「了解！！」
「分かったわ、必ず見つける。」
「俺は部屋に何かないか探してみる。」

こうしてレインは監視カメラの前に、ケイトは部屋のパソコンに向かい、ノルは部屋中を引っ掻き回すことになった。
全員が一言も口を聞かずにそれぞれの作業に没頭していると、ケイトがある物を見つける。ケイトはその情報をさらに調べていきそれが健達に有益な情報だとわかるとレインを呼ぶ。

「レイン、健達は今どこ！？」
「今地下2階に下りたとこだけど！？」
「ノル！！　無線機貸して！！」
「ほらよ！！」

ケイトは無線機を受け取るとケイトはたった今手に入れた情報を健達に伝えるべく交信するためのボタンを押す。

一方健達は地下2階に降りた後大男と一定の距離をとりつつ銃撃をしていた。

「いい加減弱ったっていいんじゃねえか？」
「まだまだ元気なようだぞ。」
「・・・しつこい。」
「全くだ。・・・・・・ちっ、もうＭ４のマガジン無えぞ。」

健はショルダーバッグから出したＭ４のマガジン２本を取り出した後、１本をバッグに入れ、もう１本をＭ４に差し込む。
その時、ショルダーバッグに入れていた無線機が鳴った。健は無線機を取り出すと無線機に話しかける。

「こちら特効野郎Ａチーム。いい情報か？」
『変な名前付けないの。』

健がふざけて応答するとケイトが怒ったようで安心したような声を返してくる。ケイトは健に先程の情報を伝えていく。

『これからあなた達をその階にある武器庫まで誘導するわ。』
「武器庫なんてあんのか！？」
『ええ。　どうやらこういう時の為に色々な物があるみたいよ。もしかしたらその中に・・・。』
「このデカブツを倒せる武器があるかもってことか！」
『そういうこと。今レインに変わるから、彼女に誘導してもらって。』
「了解！！」

健は一旦無線機から顔を離すと大男への銃撃を続けている仲間に通信の内容を報告する。健の情報により全員の闘志がさらに漲っていく。

「よっしゃあ！！！　あの野郎に一発きついのをお見舞いしてやろうぜ！！」
「あの無表情面は気に食わないと思っていたところだ。」
「・・・それ怖すぎ・・・。」

ダンが気合充分の返事をし、ニーナはストレスが溜まっていたの

か体から妙なオーラを出しており、ラインはそれを見て引いていた。
健は３人の様子を見てにやりと笑うと無線機に顔を近づける。

「それじゃレイン、ナビ頼むぞ。」
『任せとけ！！』

無線機越しに聞こえる頼もしい声を聞きつつ、健は離れた場所で突進しようと構えている大男に腰から抜いたシャープエッジを向け、声高々に叫ぶ。

「オラ来い！！！　もう少しだけ遊んでやるよ！！！！」

『次を右だ！！』

無線機から聞こえてくるレインの案内に従い道を曲がる。
先程から既にダンはスラグ弾を使い切り、ニーナはＨ＆ＫＵＳＰの２丁拳銃をしており、大男の後ろに弾切れになったＧ３６Ｃが捨てられていた。
ラインは弾の少なくなってきたステアーＡＵＧからＭ５００に持ち替え大男に撃ち込んでいる。ハンドガンの中で最強の威力を誇る５０口径弾の連射に大男が膝をつく。
大男が動けない隙に武器庫へと急ぐ４人。すると健があることを思い出す。

「なあ、アイツが来たとき、床をぶち破ってたよな。」

「？そうだけど・・・、それがどうかしたのか？」
「わかんねえのか？　武器庫に入れてもドアを破られたら俺らは袋のねずみにされちまうぞ。」
「げ・・・。」

ダンが青い顔をしてうめき声をあげる。
健達が今まで大男と互角の戦いが出来たのは銃と常に一定の間合いを取っていたからだ。狭い室内では避けることも逃げることも出来ない。
４人は武器庫が見えてくると一旦立ち止まる。大男はまだ動けないようで、姿は見えなかった。

「奴が来る前に決めればいいだろう。」
「いや、囮がいないとレイン達の方に行く可能性がある。」
「でも、囮だってそんなに数を割けれるわけじゃない・・・。」
「だが、やるしかねえだろ。」

健がそう言って話を締めると、銃の扱いに一番詳しいラインと一番体型のがっしりしているダンは武器庫に向かう。
ラインはＭ５００を健に、ステアーＡＵＧをニーナに渡す。二人がどれだけの時間囮をやることになるかは分からないため、少しでも長く持ち堪えれるように自分の銃を渡していく。

「・・・頑張って・・・。」
「そっちも早めにな。」

健の頼みに力強く頷くとラインは武器庫に向かおうとする。その時健が無線機をラインに投げた。無線機からはレインの声が漏れており、どうやら健を止めようとしているようだった。

「流石に耳元で騒がれてんのはちょっとな・・・。」

健が苦笑を浮かべる。その顔には覚悟を決めた人間特有の雰囲気が出ていた。ラインは無線機のスイッチを切ると右手に持ったまま今度こそ武器庫に向かう。

健が後ろを向くと、曲がり角から大男の影が見えていた。健はＭ５００のシリンダーを出して弾を確認するとシリンダーを戻し、銃を構える。その横に囮として残ったニーナが並ぶ。ニーナはラインから受け取ったステアーＡＵＧを構え、健に向けて笑みを浮かべている。

「囮は俺一人で充分ですけど・・・。」

「君だけに辛い事をさせては私が納得いかないんだ。悪いが拒否権は無いぞ。」

ニーナのはっきりとした口調に固い意志を感じ取った健は諦めたようにため息をつくと一歩前に出る。

「どうせ何言ったって無駄でしょう。援護を頼みますから、前には出ないでください。」

「うむ、任せろ。・・・ああそうだ、一つ言って置きたいのだが。」

「何ですか？」

「敬語は止めてくれ。なんだかよそよそしく感じてしまう。」

ニーナの妙な注文に目を白黒させつつも、健は頷く。

「・・・分かった。ニーナ。」

「うん、それでいい。」

呼び捨てしたのに何故か喜ばれているのに首を傾げたが、大男が

曲がり角から姿を見せると、目つきを鋭くして相手を睨む。ニーナも臨戦態勢に入ったようで、ステアーＡＵＧに取り付けられているスコープを覗き込んでいる。
　大男は流石に今までの銃撃のダメージが蓄積していたのか体のあちこちに傷が出来ており床に血の雫がいくつも落ちていた。それでも目はしっかりと２人に向けられ、悠然と通路を歩いてくる。

「一応ダメージは有ったようだな。」
「まだまだピンピンしてるけどな。」
「しょうがない。何事も都合よくいくとは限らないからな。」
「仰るとおり。」

　健はＭ５００の狙いを大男の頭部に合わせると引き金に指を掛ける。大男も爪を構えて戦闘態勢に入った。
　二人は大男の目をまっすぐに見返し、不適な笑みを浮かべる。その目には絶対に曲がらない信念の光が宿っていた。

「悪いが、大人しく殺される気は無いぜ。」
「私達は諦めが悪いからな。」

ドオン！！！ドオン！！！　　ガガガガガ！！！！！
オオオオオオオオオ！！！！！

　続けざまに響く銃声と咆哮が最終ラウンドのゴングとなった。

「離せ！！　アタシも健の手助けをすんだ！！」
「今から行ったって意味はないぞ！！　それどころかかえって足をひっぱっちまうかもしれないんだ！！」

警備室ではレインとノルが言い争っていた。健と合流しようとするレインだが、ノルはむしろここで待っていた方がいいとレインを止める。下手に人数を増やしても大男には意味はなく、武器庫が開くのを待つべきだとノルは説得するがレインはそれでも行こうとする。

「お前はラインやダン、ニーナや健の決死の覚悟を無駄にするつもりか！？　ここで待つんだ！！」
「じゃあお前はここで指をくわえて待ってろよ！！　アタシはなんと言われようと行くぜ！！！」
「ダメよレイン。」

レインはノルを押しのけドアに向かおうとしたが、ドアに手を伸ばした瞬間ケイトが椅子に座ったままＭ６０を構えていた。ノルはケイトのとんでもない行動に絶句していたが、レインは自分に向けられる銃口にも怯むことは無かった。

「何で止める！！」
「健を信じてるから。」

レインの怒号を平然と受け止め、ケイトは自分が残る理由を告げる。

「彼は死なないって、帰ってくるって約束したもの。だから、私はそれを信じることにする。」

「ケイト・・・・。」

一切感情の込められていないケイトの言葉に、レインも何も言うことが出来ない。

彼女は必死で我慢しているのだ。本当は自分も行きたくて仕方が無いのに、自分では足手まといになってしまう。だからここでのサポートで少しでも役に立とうとしていたのだ。レインにはその気持ちが痛いほど分かった。

「・・・・。」

レインは無言で監視カメラのモニターの前の椅子に座る。その時、ケイトが持ったままだった無線機にラインから連絡が入る。

銃器が保管してある部屋には電磁柵によって隔たれており、パスコードがないと開くことができないとのことだった。

「銃で壊せないのかよ！！！」

「さっきからやってるよ！！」

無線機からはショットガンの物と思しき銃声が聞こえていた。レインはモニターのコンソールを操作してカメラを切り替える。

カメラは「武器格納庫」と書かれた扉の前でレミントンＭ８７０を連射しているダンと扉の横で必死に様々な順番のパスコードを打ち込んでいるラインが写していた。だが文字盤にはエラーが表示されるだけで一向に扉は開かず、いくら散弾を打ち込んでも扉は壊れなかった。

もう一つのカメラには大男が走りながら爪を振るい、それをわずかの差で避ける健が写っていた。ニーナが大男の両膝にＡＵＧを連射し動きを止めると、その隙に健が大男から離れる。

健の衣服は所々破けており、そのいくつかは血が滲んでいた。

対する大男も先程より傷が増えており、互いがどれだけ死力を尽くして戦っていたのかが分かった。だが、やはり不利なのは健の方のようで、既に肩で息をしている状態だった。このままではいつかやられてしまうだろう。

ニーナは大した消耗はしていないようだが、彼女では大男に接近戦を挑むことは出来ない。すぐに捕まり、殺されてしまう。

カメラに写る絶望的な状況に、レインは自分が何も出来ない悔しさを抑えきれず壁を殴りつける。

「くそ、どうすりゃいいんだ！！」

「・・・私が武器庫を開ける。」

ケイトはそう言うとパソコンのキーボードを先程までとは比べ物にならない速さで操作していく。

パソコンの画面に写される無数の文字にノルが驚愕する。

「彼女、ハッキングができるのか！？」

「正確にはクラッキングだってよ。アイツ、日頃から色んな所に入って情報を盗んではそれを売って稼いでるんだよ。」

「・・・人は見かけによらないな・・・。」

ノルとレインが後ろで呆気に取られている間、ケイトは手を一切休めることなく、画面に表示される文字を見ては何かを呟いていた。

「ファイヤーウォールがいくつもあるわね・・・、少し時間がかかっちゃう。」

ケイトはガードの高さに焦りつつ、無線機でライン達に連絡を入れる。

「今からこの施設のコンピュータに侵入してその扉を開けるから、少しだけ待ってて。」
「・・・分かった。なるべく早くして。」
次にケイトは施設内の放送用のスピーカーをスイッチを入れた。

大男のショルダータックルを完全に避けることが出来ず、健は斜め後ろに突き飛ばされる。
「ぐあ！！」
「健！　貴様ぁ！！」
ニーナがそのまま自分の方に突っ込んできた大男に銃撃を加えつつ横にずれてタックルをかわす。大男はそのまましばらく進んだ後壁にぶつかりつつ止まる。
「大丈夫か！？」
「ああ、直撃はしてない。　まだいける。」

健はそう言って立ち上がる。その時、監視カメラの横にあったスピーカーからケイトの声が聞こえてきた。

『健、聞こえてる！？』

「おう、聞こえてる。」

健はおそらく監視カメラでこちらの様子を見ているケイト達に監視カメラに手を振って答える。

『今から１０分・・・いえ５分だけそいつを足止めして！！　やれる！？』

「５分か・・・、少し長いぞ。」

「なんなら逃げてもいいぞ。それくらいなら一人でも何とかなるしな。」

「冗談を。ここまで来たら地獄の果てまで付き合おう。」

ニーナはＡＵＧの空マガジンを抜いて最後のマガジンを差し込むと、こちらに振り向いて口からうなり声を上げている大男を一瞥し、口の端をわずかに上げた。

健は弾切れになっていたＭ４Ａ１を捨てるとシャープエッジを抜いて大男に向ける。

その目からは闘志が損なわれておらず、彼の不屈の心が健在なのを教えていた。

「了解。５分だけ粘るから早くしてくれ。」

『善処するわ。』

ケイトはタイピングの速度を上げると、この状況から逆転するために１枚目のファイヤーウォールを突破していく。

数分後。

大男が爪を連続で振りつつ健に迫る。健は大男の両手から繰り出される破壊の暴風を冷静にかわしつつその感情が一切表れない顔面に9ミリパラベラムを叩き込む。

ガガガン！！

グオオ・・・。

たまらず顔を抑え、その場に立ち尽くす大男。その隙に健は距離をとる。健はシャープエッジ1丁で大男を翻弄していた。

大男が近づいてくると膝に銃弾を撃ち込んで動きを止め、爪を振り回すとニーナが頭部を、健が腕を撃って動きを鈍らせ、ぎりぎりで攻撃をかわす。そんな攻防をしばらく繰り返していた。

オオオ・・・。

大男がどこか悔しそうな目をしつつ、うなり声を上げて健達へと振り向く。その目は片方が完全に潰れており、先程から今までのように治癒することは無かった。

2人はそのことに気づき、大男にようやく限界が近づいていると予想する。

「私達の苦労も無駄ではなかったようだな。」

ニーナは弾切れになったステアーＡＵＧを捨て代わりにＨ＆ＫＵＳＰを抜いており、弾切れになったマガジンを抜いて次のマガジンを入れ初弾を装填する。

「世の中無駄な事なんてねえよ。　ただ、いつ役立つかは神様しか知らねえけどな。」

健は再び突っ込んできた大男に照準を合わせる。だが、大男は健の近くまで来ると予想外の行動に出る。

大男は健が撃とうとした瞬間向きを変えた。

「な！？」

そのまま健のシャープエッジから放たれた銃弾をかわすと、後ろにいたニーナの前に立つ。

突然の奇襲に驚き慌ててＨ＆ＫＵＳＰを向けるが、大男はニーナの細い首を掴むとゆっくりと持ち上げていく。

「くっ、はな・・・せ・・・！」

あまりの圧力に満足に喋ることも出来ないニーナ。銃を大男の顔面に向けようとしたが、大男の空いた方の手が無造作に手を払い、両手に構えていたＵＳＰを弾き飛ばす。

「くそ、離しやがれ！！！」

健がシャープエッジとデザートイーグルを連射するが、大男は苦痛に顔を歪めつつもニーナを掴む手を離さず、逆に圧力を強めていく。

「か・・・は・・・。」

段々と意識が朦朧としてきているニーナを見て、健は弾切れになった2丁をホルスターに仕舞い今まで温存していたＭ５００を抜く。

「こいつは効くぜ！！！」

ドオン！！！ドオン！！！ドオン！！！

規格外の反動を殺しきれず一発撃つごとに腕が跳ね上がっていたが、弾は全てニーナを掴んでいる方の腕に命中し、あまりの威力に大男の腕が千切れ飛ぶ。

千切れた腕と共に床に下りたニーナは咳き込みつつも首についたままの腕を乱暴に外す。

「無事か！？」

「ああ、もう少し遅ければあの世でスーパーでもやっていたところだ。」

「・・・あの世にスーパーは無えよ・・・。」

微妙にずれたことを言っているニーナの様子に大丈夫だと安心しつつ、大男の方を見る。

大男は未だ千切れた腕を押さえていたが、うなり声にわずかな変化が生じていた。まるで腕から何かを引き出そうとする声に健は嫌な予感を感じていた。

健が大男へとＭ５００を撃とうとした時、大男の先の無い腕の断面から何かが飛び出した。

「な！？　マジかよ！？」

「え・・・。」

健の驚愕の声に咳き込んでいたニーナが顔を上げ大男を見ると、大男の腕からは直径１０ｍｍほどの触手が４本生えてきていた。

「今頃パワーアップすんのかよ！！」

健が悲鳴じみた声を上げると大男は２人に向けて触手を伸ばす。

「くそっ！！！」

かなりのスピードで迫る触手に焦りつつ、健はＭ５００を連射する。

１０発以上の連射をすると使用者が銃を撃てなくなるほどの反動を何とか抑えこみ、向かってくる触手の２本を吹き飛ばす。だが、先程撃った時から弾をリロードしていなかったため装弾数５発のＭ５００はそこで弾切れになった。

銃弾の当たらなかった２本は真っ直ぐに健の腹部に向かう。

健は避けようとしたが、その後ろにはまだ満足に動けないニーナがおり、今避ければ確実に彼女は触手に串刺しにされてしまう。

健は避けることもできず、ポケットに入れていた折り畳みナイフを取り出し、せめてもの抵抗を試みる。

「来い！　刻んでやるぜ！！」

警備室。

「よし・・・。　これで開くわ！」

ケイトは最後のファイヤーウォールを突破してシステムのコントロールに成功する。
武器庫ではようやく開いた扉の中に駆け込んで武器を取っていくダンとラインが写っていた。

「これでようやくあのバケモンを倒せるな。」
「そうだな・・・！？」

レインが健達が映っているモニターを見て絶句する。ノルがその様子を見てレインの見ている物を確認すると、驚愕の声が漏れた。
カメラには、腹部に2本の触手が刺さりそのまま持ち上げられている健の姿が映っていた。
持ち上げられたままぴくりとも動かない健と、自分の銃を拾い必死で銃撃を行うニーナ、そして健を貫いた触手で持ち上げたまま止めを刺そうとする大男。
ケイトはその光景を見て素早く無線機でラインに連絡を入れる。だが、無線機を持つ手は小刻みに震えていた。

「ライン、急いで健の所に行って！！」
『！？何かあったの！？』

無線機からはラインの慌てた声が聞こえたが、ケイトはそれに取り合わず無線機に珍しく怒鳴りつける。

「いいから急いで！！！」
『・・・分かった！』

無線機からラインの了承する声が聞こえるとケイトは無線機を切り、モスバーグＭ５００を持ってドアに向かう。既にレインとノルは準備を終えてドアの前で待っていた。

「もうここにいる理由は無いしな。健の奴を助けてやんねーと。」

「早く行くぞ。」

レインが一足早く外に出る。

「おいレイン！！」

「私達も早く行きましょう！」

ケイトも続けて出て行く。ノルは置いてけぼりを食らわないように急いで出る。

（お願い、無事でいて・・・。）

（頼むからアイツをアタシから奪わないでくれ。神様、お願いだ・・・！）

２人は胸中の不安を必死で押し殺しつつ、健の下に向かう。

一方、ラインとダンは一足早く健達の下に辿り着いていた。

「な、健！！！」

ダンが腹部を串刺しにされている健を見て叫ぶ。健は未だに動かず、ニーナはたった今大男の腕に吹き飛ばされるところだった。

「ぐあ！！」

床に叩きつけられるニーナ。仲間の無残な姿を見て、ダンの頭の何かが切れた。

「てんめえええええええ！！！！」

ダンは武器庫から拝借した５．５６ミリＬＭＧ（ライトマシンガン）Ｍ２４９を大男に向けて発砲する。

ガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！！！！

ＳＭＧとは比べ物にならない連射に大男の体が後ろに下がっていく。

健を持ち上げていた触手にも弾丸が当たり、健はそのまま千切れた触手が刺さったまま床に落ちる。

ダンは健が床に落ちると笑みを浮かべラインに合図を送る。

「ライン今だ！！！」

「・・・了解。」

ラインは肩に担ぐようにして構えている対戦車ロケットランチャーＡＴ４を放つ。

バシュウ！！！

発射されたロケット弾は狙い通りに大男に向かう。大男はようやく止んだ弾幕から飛んできたロケット弾を避けることができず、胸に直撃する。

ドゴオオオオン！！

大男は胸部で起こった大爆発により後ろに大きく吹き飛ばされた。その胸は大きく抉れており心臓らしき物が半分になっているのが見えた。
大男は床に血溜まりを作りながら、ゆっくりと動かなくなっていった。

「ようやく死んだのか・・・。」
「全く・・・しつこい奴だったな・・・。」

床でうずくまったままだった健がようやく口を開いた。腹部の傷を押さえている健に3人が急いで近寄る。

「おい、あんまし喋んな!!」
「傷の具合はどうだ!?」

ニーナが背中に貫通している傷を見ているラインに尋ねる。

「・・・傷事態は大きいわけじゃない。けど、内臓を損傷してるし、出血も激しいから何とも・・・。」
「私なんかを庇ったから、私の所為で・・・!!」

ニーナが己の未熟さに歯噛みすると、健は激痛を堪えて無理に笑みを浮かべる。

「心配すんなって。このぐらいじゃ俺は・・・ゲホゲホ!!」
「喋らないで。今手当てするから。」
「ケン!! 皆!!!」

その時レイン達が到着した。ノルは健の姿を見て顔を曇らせるが、

健がこちらを向いて軽く頷くとノルも頷き返す。
「ダン、俺達は全員の武器を調達してくるぞ。」
「・・・分かった。」
ダンとノルは武器庫へと向かっていった。
「ケンおいしっかりしろ！！！」
「そうよ、こんなところじゃ死なないって言ったでしょ！！！」
「・・・今お前らに殺されそうだ。」
無我夢中で自分を揺する2人の所為で痛みが増している健。ラインが手当ての邪魔になるので2人を離れさせる。
ラインはケイトのリュックから救急箱を出し、中から縫合用の針と糸を出して傷を縫っていく。
「ぐうう・・・・・。」
「もう少しだから我慢して。」
麻酔などが用意できなかったため激痛に耐えなければならず、歯を食いしばる健。ようやく縫合が終わると全身から力を抜いていた。
「はあ・・・はあ・・・、もう縫われんのはごめんだ・・・。」
「見てた方は中々面白かったがな。」
「他人の不幸を見せ物にするな！！」
健の突っ込みに女性陣が笑い声を上げる。その時ノルとダンが武器弾薬を大量に持って帰ってきた。健はあまりの種類の豊富さに絶句している。

「ＦＮＰ９０（５．７ミリ弾使用、装弾数５０発）にＳＰＡＳ１５セミオートショットガン（１２ゲージショットシェル使用、装弾数６＋１発）、対戦車榴弾砲ＲＰＧ７まであんのか・・・。」
「ここは軍の武器庫か？」
「それよりお前は何でそんなに詳しいんだよ・・・。」

レインの突っ込みをさりげなく流し健はＰ９０を２丁両手に持つ。
「おい、怪我してんのに無茶すんのか。」
「仕方ない。怪我で満足に動けないからこうするしかないんだ。」

ノルの冷ややかな目を受けつつＰ９０のマガジンをショルダーバッグにしまっていく。
ノルとライン、ニーナはＰ９０を使い、弾薬の消費が比較的少ないレインとケイトはそのままでダンは武器庫で見つけてきたＭ２４９の弾帯を体に巻いていた（他の弾帯は専用の箱に入れてリュックに入れていた）。

「移動はできるか？」
「ああ、問題ない。それよりどうする？　エレベーターへの道は穴が開いて通れなくなっちまったし・・・。」
「それなら大丈夫。地下に街からの脱出用に列車が通ってるの。そこに行けばいいわ。」
「抜け目ねえなあ・・・。」
「それじゃ、底に行くとしますか。」
『・・・寒いぞ』

全員から白い目で見られ健は逃げるように歩いていった。

第１２話：死闘（後書き）

今回は書き終わるのに時間がかかりました。
・・・きつかった。
多分あと3、４話で終了です。もう少しだけこの未熟者の話にお付き合いください。

第１３話：別れ

パパパパパ！！　ガガガガガ！！！！
グギャアアアアアア！！　ギギイイイ！！！！

隣のドアから突然出てきたハンターはケブラー製の防弾チョッキを貫徹するほどの貫通性を持つ５．７ミリ弾を食らい、断末魔の叫びを上げつつ絶命する。
ハンターが出てきた部屋にはもう一匹いたが、続けて飛来した５．５６ミリ弾の弾幕により反撃する間もなく息絶える。

「ふい～～～、あぶねえあぶねえ。」
「こいつら奇襲ばっかしてくんな。」

ハンターを迎撃した健とダンは硝煙の出ている銃口を下げつつ周囲を警戒する。

「奇襲するだけの知能があるってことだ。」

ノルがハンターについて冷静に分析していく。

「全く鬱陶しいぐっ！！」

突然健が大怪我をしている腹を押さえる。

「大丈夫！？」
「・・・見せて。」

ケイトとラインが急いで駆け寄る。健の腹に巻かれている包帯に

はうっすらと血が滲んでいた。
健は2人が包帯を取ろうとするのを止めさせ、進むのを促す。
「俺はまだ平気だからとっとと行こうぜ。早く街を出てきちんとした治療すりゃいいんだしよ。」

健の言葉に2人は不満そうな顔をしつつ引き下がる。
あれから一行は地下3階まで下り、時々現れるハンターを撃破しつつ地下4階最奥の位置にあるプラットホームに向かっていた。
だが、健の移動スピードが包帯に滲み出る血の量に比例して遅くなっているのに全員が気づいていた。本人は平気なふりをしているが、確実に健は限界に近づいていた。
また、大男の触手からウイルスに感染している可能性もあり、健の生存確率は秒刻みで下がっている状態だった。
誰もがそのことに気づいているがあえて言わない。言ってしまったら取り返しのつかないことになると、何かがそう告げていた。
全員が無言のまま先に進んでいくと、「この緊急時、点検時以外の立ち入りを禁ず。」と書かれたプレートの貼られた扉を見つける。

「ケイト、これは？」
「この先は発電施設や脱出用の設備しかないらしいの。自爆装置の本体なんかもあるから普段は誰も入れないようにしてるみたい。」
「自爆装置！？そんなモンがあんのか！？」

レインが素っ頓狂な声を上げる。

「ここでの実験は違法なものが殆どのようだから証拠隠滅は必要だし、ウイルスが漏れたりしないようにするのもあったんだろう。」
「けっ、保身のことには抜け目が無えのな。」

ニーナの考えに顔を歪めつつ毒づくダン。健は扉に近づき、横にカードリーダーがあるのに気づく。
健がタクティカルベストの胸ポケットからカードキーを取り出し、スリットにカードを通すと扉からカチャリという音がした。
「これで開いた・・・・。」
ダンが扉を開けた瞬間、研究所内に警報音が鳴り響く。
「！！？」
「えっ！？」
「な、何だ！？」
全員が突然のことに慌てると、放送がかかりとんでもない事が告げられる。
『研究所内に侵入者あり。これより全B．O．Wを侵入者の下に開放します。職員は速やかにパターンDの通りに避難してください。繰り返します・・・・・・。」
『何いーーーーーーー！！！！？」
全員が驚きの声を上げる。通路の曲がり角からは既に聞き慣れた金切り声が聞こえてきていた。
「嘘、何で！？」
「くそ、侵入者用のトラップか！鬱陶しいの仕込みやがって！！」
「いちいち構ってる暇は無い！！早く行くぞ！！」
ノルが扉を引っ張ろうとしたとき扉が勢い良く閉まり、かすかに鍵の掛かる音がした。慌ててダンが扉を開けようとするが、扉はび

くともしなかった。

「この、ふん！！　ふん！！！」

「扉を閉めて退路を断ち、ハンターで畳み掛けるか・・・。」

「畜生！！もう少しだってのに！！！」

健が大声で怒鳴りつつ扉を蹴るが扉はびくともしなかった。

「何とかなんないのか！？」

ダンがまったく開かない扉から手を離して叫ぶ。すると、先程からじっと考え込んでいたケイトが口を開く。

「・・・これは警備システムの一つだろうから、もしかしたら警備室にいければ何とかなるかも・・・。」

「どっちみちそれに賭けるしかなさそうだぜ・・・。」

健が両手にＰ９０を構えて言う。通路にはハンターが集まりつつあり、まるで開戦の合図を待つかのように距離をとっていた。

その数は今までとは比較にならないほどであり、通路がハンターの体色の緑色に染まっていた。

「・・・また囮が必要みたい。」

「・・・今度は４人がバラバラに散って敵を分散させるぞ。残りは警備室に向かえ。」

「今度はアタシも囮やるぞ。」

話合いの末囮役はレイン・ノル・ダン・健が行うことになった。

健が囮になることに全員が反対したが、「どっちにしたってハンターに狙われるんだ。なら俺は単独で動いた方がやりやすい。」と

いう健の言い分により、単独戦闘をすることになった。

「それじゃあ皆、幸運を！！」

ノルの激励とともにラインが武器庫からくすねていた手榴弾を3つハンターに投げる。

ドゴオオオオオオン！！！！

数秒後、通路に爆発音が響き渡る。健達は床に伏せて爆発をしのぐと、煙が晴れる前に駆け出すと同時に一斉に発砲する。

通路に複数の銃声が響き渡り、健達が通路で壁となっているハンターの群れを倒して道を作っていく。

銃弾を何発も撃ち込まれ息絶えたハンターの死体を踏み越え、ハンター達の壁を突破すると囮役の面子が壁となり警備室に行くケイト・ダン・ニーナの3人を先に行かせる。

「手早く頼むぜ！！」

「もちろんだ。」

ノルの言葉にニーナが微笑を浮かべて答える。

「ケイトを頼んだ！！」

「言われなくても！！」

健の頼みをダンが健の肩を叩きつつ引き受ける。

「そっちは任せたぜ！！」

「そっちもね！！！」

レインとケイトは互いに自分の役割を確かめ合いつつ笑みを返しあう。
レインのＧ３Ａ４が比較的遠くにいるハンターを撃ち殺していき、ラインとノルは近くのハンターを狙撃していき、健は仲間に近づくハンターを最優先に狙っていく。
健が飛び掛ってきたハンターを空中にいる間に蜂の巣にしたところで右手に持っていたＰ９０の弾が切れる。
健がマガジンを変えながら後ろに下がり散開の合図を出す。

「そろそろ頃合だ！！　皆、死ぬんじゃねえぞ！！」
「お前こそ無茶するな！！」

ノルの注意を無視し、健はＰ９０を撃ちながら走っていく。他の者も散開しハンター達を分散させていく。
ハンターの群れは４つのグループに別れてそれぞれの獲物を追跡していく。
こうして研究所内は銃声に包まれた。

ガンガンガンガン！！

レインはＧ３Ａ４を単発で撃ちつつハンターから距離を取っていた。レインのＧ３Ａ４は銃身が長いため接近されるとどうしても反応が遅れてしまうため絶対に接近されないようにしているのだ。
一発一発を確実に当てて接近を許さないようにしつつ、レインの目はある物を探していた。

（健はどこだ！？）

彼女は健をサポートするために残ったのだが健の姿を見失ってしまい、彼の姿を探していた。最初は銃声を頼りに探せばいいと思っていたが、研究所内はまるでわざとそうしたかのように入り組んでおり、健を見つけることができなかった。

（くそ、一体どこにいんだよあの馬鹿は！！）

どんどん増していく焦燥感を必死で無視しつつわずかに数が減っているように見えるハンター達に向けて銃撃を浴びせていく。

一方ラインも健の姿を探していた。彼女は途中までハンターの殲滅に集中していたのだが、通路に大量のハンターの死体と共に血痕が残っているのを見つけたため急いで健を探し始めたのだ。

血痕は幾つか見つかり、出血の量は増えていなかったが毎回ハンターの死体がいくつも見つかっており、健が相手をしているハンターの数がかなりの数だと確信していた。

（弱った獲物から仕留めに掛かってる・・・。早く合流しないと・・・！）

曲がり角から飛び掛ってきた2匹のハンターに、右側のハンターを撃ち殺しつつもう1匹のハンターの首を狙ってきた攻撃を紙一重で避けつつ左手で抜いた両刃のナイフでハンターの喉を切り裂く。

「・・・邪魔よ・・・。」

ラインの口から恐ろしく冷たい声が出るとハンターは金切り声を上げて床に倒れる。ラインはそれを冷たい目で見つつ先に進んでいく。

「うおおおおお！！！！」

両手に持ったＰ９０を乱射し、空中と床からの同時攻撃をしてきたハンター達を纏めてなぎ倒していく。攻撃してきたハンター達は後ろにいた別のハンター達を巻き込みつつ吹き飛ばされる。しかし未だに襲ってくるハンターの数は減っているようには見えなかった。

「はあ・・・、はあ・・・。畜生、馬鹿みたいな数を送りやがって・・・。」

健は両手のＰ９０を交互に撃ちつつ距離を取る。体には無数の切り傷があり、特に右太腿の傷が酷く、床に血が垂れていた。

３匹のハンターが走り出した。１匹はそのまま正面から突っ込み、２匹は左右の壁を一糸乱れぬ蹴って三角跳びの要領で健に急接近していく。

健は後ろに下がりつつＰ９０を連射するが、正面のハンターに弾丸が集中し左右のハンターは仲間が蜂の巣にされるのも気にせず壁から跳躍した勢いで天井を蹴りまるで弾丸のような勢いで突っ込んでくる。

健はあえてハンター達に向かっていく。ハンターの爪は健の頬を切り裂いただけに終わり、健はハンターの後ろに来ると後ろに向けてＰ９０を連射した。

後ろにいた２匹のハンターは全身に５．７ミリ弾を食らい息絶える。

健は弾の切れた両方のＰ９０のマガジンを急いで換える。通路にいるハンターが皆うなり声を上げていた。今にでもこの場にいるハンター全てが突っ込んでくるだろう状況に健はあえて笑みを浮かべ

る。
その顔は目の前の絶望に呑まれることなく、どこまでも進めそうなほど力強かった。
「必ず生き残るって約束したんでな。悪いが、お前らなんかに殺される気はねえぜ！！」
マガジンの交換が済んだＰ９０を構えて健は後ろ向きに走る。
キシャアアアアアアアア！！！！
「うおおおおおおおおおお！！！！！」
続けざまに響くハンター達の大合唱と健の雄たけびが開戦の合図となった。

「見えた！！」
ケイトが前方に見えてきた警備室を指差す。
ケイト達は研究所内の全てのハンター達が下の階に集まっているのを確認すると急いで警備室に向かっていた。
「よし、俺は外で警備をしとく！」
「なら私はケイトの警護に回ろう。」
ダンは通路に留まり近づくハンターを警戒し、ケイトとニーナが警備室に入った。
ケイトは部屋に入ると直ぐに先程使ったパソコンの前に座り警備システムにアクセスしていく。

「よし、ここからならロックを解除出来る。ニーナ！！放送で皆に連絡！！」
「了解した！」
ニーナはケイトにの指示に従い放送用マイクのスイッチを入れた。
『皆！！　ドアのロックを今から開ける！！　急いで脱出口まで来てくれ！！』
「ようやくか・・・。」
ノルは今しがた太腿に差していたマチェット（木の枝などを切り払うために使う軍用のナタ）で脳天を叩き割ったハンターからマチェットを引き抜くと、周囲のハンターの死体を踏みながら脱出口に向かっていく。
「くそ、まずは皆と合流すっか・・・。」
レインはＧ３Ａ４のマガジンを交換しながら向かう。
「・・・。」
ラインは向かってきたハンター２匹を、１匹をＰ９０で撃ち殺し、もう１匹は爪での攻撃を避けたと同時に脳天にナイフを突き立てた。
一連の動作には５秒も掛かっておらず、歩みも一切止めることはなかった。
ラインは一旦健を探すのをやめ皆と合流するため走っていく。
数分後、地下４階に続く扉の前に集まった者の中に１人だけ足りないのに全員が気づく。

健が一向に来ないのだ。

「くそ、あいつは何で遅いんだ！！」

「ライン、無線機は！？」

「・・・健に返した。」

ラインに健が無線機を持っていることを確認すると、自分の無線機に向かって大声で叫び健に呼びかける。

「おい健！　返事ぐらいしやがれ！！」

「健、返事をして！　お願い！！」

「おいケン呼んでんだぞ！！　返事をしやがれ！！」

「頼む、応答してくれ！！」

「・・・返事をして・・・！」

「健早く出ろよ！！」

その場に居る全員が無線機に向かって呼びかける。その必死の呼びかけが通じたのか、程なくして無線機から声が聞こえてきた。

「お～す、皆・・・無事だったか・・・。」

無線機から聞こえてきたのは、かつて無いほど弱った健の声だった。

「！？健どうした！？」

「ああ、右の太腿と左肩にあのトカゲもどきどもの爪が刺さってるし、腹の傷は完全に開いてる。・・・満足に動くこともできねえよ。」

まるで他人事のように自分の体の状態を話していく。あまりの負傷の多さに息を呑む者すら出る。
健は無線機の向こうから反応が返ってこないのも気にせずに離していく。

「俺はここまでみたいだ。お前らだけで行け。」
「そんな事できるかよ！！！」

健の諦めの入った言葉にレインが叫び返す。彼女の目には涙が溜まっており、顔は興奮のために真っ赤になっていた。

「言ったじゃねえかよ！！　こんなところで死なねえって！！　約束したじゃねえかよ！！」
「・・・。」
「頼むから、死なないでくれよ・・・。　お願いだよ・・・。」

途中から涙を流しながら、声を震わせて無線機越しに懇願する。しばらく無線機からは何も返ってこず、周囲に沈黙が下りた。

「・・・誰も死ぬなんて言ってないんだけど。」

健がどこか気まずそうな言葉が返ってきた。

『・・・え？』

全員が驚きの声を上げる。さっきの話で健がてっきり死んでしまうと思っていたので、健の言葉に一瞬全員の動きが止まってしまった。

「えっ、あっ、えっ・・・？」

「お～～い、落ち着け～～～～。」

レインが驚きのあまり周囲をウロウロするのをダンが止める。

「いや、ちょっと面白いモン見つけてな。もしかしたら何とかなるかもしれねえ。」

「本当！？」

「ミスったらどうなるか分かんねえけどな。」

その一言に高まっていた雰囲気が一気に冷めていく。

「そんな物を使うのか？」

「仕方ねえ。もう目の焦点も合わねえんだ。・・・こいつに賭けるしかないんだよ。」

さらりととんでもない事を告げた健にノルが尋ねる。

「・・・必ず、生きて帰るんだな？」

「ああ・・・。」

「分かった。信じるぜ。」

そう言うとノルはドアを開けて先に進んでいく。他の仲間はノルの突然の行動に驚いたが、やがて彼の考えに気づき、後に続いていく。

彼は信じたのだ。健が必ず戻ってくると。たとえその確率が限りなく低いと分かっていても、それを乗り越えてくると、そう信じたのだ。

他の仲間もノルと同じ考えだった。彼と出会って一日も経っていないが、健はこの地獄の中、一番危険な目に遭い、その度にピンチに陥っては潜り抜けてきたのだ。たとえどれだけ困難な状況でも彼

なら大丈夫だと、全員が確信していたのだ。
最後にレインとケイト、ニーナが少しだけ健と話す。

「ぜってえ来いよ・・・・。」
「信じてるから。」
「君には借りばかりだからな。一つも返さぬままで死んでくれるなよ？」
「安心しろ。俺は約束は破らねえ。・・・それじゃあな。」

その言葉を最後に、無線機から健の声が聞こえることは無かった。
健を除いた6人はプラットホームに向かう。その歩みは迷い無く立ち止まることも無かった。

「・・・行ったか・・・・。」

健は椅子に座ったまま机の上に置いてある手帳に目を移した。
表紙には「ゲリー・ロッカス」と書かれており、この部屋に住んでいた人間がつけていた日記らしかった。
最初の方は研究所に来た経緯などだったが、最近になって書かれた部分に健にとって起死回生の言葉が書かれていた。

9月18日
ジャックとか言う奴が尋ねてきた。何でも知り合いに譲ってもらった新型ウイルスが危険な物だから手を貸してほしいという内容じゃった。最初は半信半疑じゃったが現物を見せてもらい本当の事だと知る。
ワシは最近になってようやく試作品が完成した“デモリショナー”の調整の手伝いをしてもらい、有事の際はこいつでどうにかする事にした。

月　日

ジャックが血相を変えて部屋に駆け込んできた。先程の街にバイオハザードが起こったことを告げる放送を聞いてワシと同じ危険性を感じたらしい。

ワシらは見捨てられたという可能性を・・・・。

ジャックは中を回って脱出できないか探るようだ。ワシは念のため“デモリショナー”を起動させておくためにここに残ると言うとジャックは紫色の液体の入った注射器を差し出す。ラベルが貼られており、「改良型Gウイルス」と書かれていた。

ジャックが自分の身に何かあった時のためにとワシに持っていてほしいと言って来た。ワシは必ず取りにくることを条件にそれを受け取るとジャックは部屋から出て行った。

日記はここで終了していた。健は部屋の3分の1を占める何かの実験装置の操作盤の前にあるハンターの死体の横で絶命している初老の男性に目を向ける。ハンターと相打ちになったらしいゲリーと言う名の研究員の死に顔には未練がありありと浮かんでいた。

健は机の上に置いておいた「改良型Gウイルス」と書かれたラベルの貼ってある注射器を取ると、針のキャップを口で取りそのまま口に咥えて右腕に刺す。

中の液体を何とか注入すると注射器を捨て今までの疲れが一気に来たのか椅子に体を預け力を抜く。

「ふう、疲れたな・・・。　少し・・・・・、休むか・・・・・・・・。」

健は僅かに目を動かしてレイン達が向かっているであろうプラットホームの方向を見つめ、誰にも聞こえないような声で呟く。

誰にも言わなかった、弱さを。

「怖えなあ。・・・・・・・・死にたく、ねえよ・・・・・。」

健は静かに眼を閉じる。体の力が完全に無くなり、手をだらりと下げ首は僅かに傾いたまま動かなかった。

その表情はとても安らかだった。まるで遊び疲れて眠る子供のように・・・。

そして部屋には健の体から流れる血が床の血だまりに垂れる音だけが響くだけになった。

第１４話：覚醒（前書き）

何かどんどん小説を書くスピードが遅くなってます・・・。（泣）

第１４話：覚醒

研究所内のとある部屋、一人の少年が椅子に座っていた。
先程からぴくりとも動かなかった少年の指が僅かに動いた。そのまま何度か指を小刻みに動かした後少年はゆっくりと立ち上がる。
立ち上がった後しばらく何もせず目を瞑っていたが、ゆっくりと目を開ける。
その目はまるで血のような紅い目になっていた。

「おい、見えたぞ！！」

ノルが大声を上げて指差した先には大きめのゲートがあり、上に「プラットホーム入り口」と書かれたプレートがあった。

「ようやく出口か・・・・。」
「長かったね。」
「一段落は早えぞ！　急いで乗り込もうぜ！」
「・・・そうね。」

一行は急いでゲートをくぐる。するとプラットホームの奥、列車の先頭車両の方から乾いた拍手の音が聞こえてきた。

「おめでとう。よくここまで生き残ってくれた。」
レイン達が即座に声のした場所に銃を向けると、そこには白衣を着た男がいた。男は口元に嘲笑を浮かべながら拍手を止めるとレイン達に歩み寄ってくる。
ノルは躊躇うことなく男のつま先に向けてＰ９０を発砲する。
「それ以上近づけば当てる！！」
「怖いな、私は人間だぞ？　ゾンビじゃあない。」
「知ったことか！！」
ノルの言葉に男は歩みを止めたが、顔の嘲笑は変えることはなかった。
ノルが男に発砲したのは、彼の鍛えられた第六感が警報を鳴らしていたのだ。
「そう邪険にしないでくれたまえ。私はただペットの自慢をしに来ただけだ。」
「ペット？」
「そうだ。さあお前達、皆さんに挨拶しなさい。」
男が自分の後ろに向けて手を振る。その何気無い動作の中に隠し切れない狂気の笑みが出たのをラインとノルは見逃さなかった。
「全員戦闘態勢！！　何か来るぞ！！」
ノルの声が響くのと男の後ろの暗闇に包まれているところから黒い影が飛び出してきたのは同時だった。
影はいくつも現れると２匹づつに別れてレインたちにかなりのスピードで迫ってくる。

いち早く反応したノル、ライン、ニーナは影達に銃撃を見舞う。
しかし影達はさらにスピードを上げて銃弾を避ける。

「なっ！？」

「何てスピード！！」

影達はスピードを落とすことなく跳躍した。軽く2，3メートルもの高さにまで上がると銃撃をしたメンバーに襲い掛かる。
ノル達はあえて避けようとしなかった。その時後ろにいたレイン、ダン、ケイトの銃が空中にいた影達に銃弾を叩き込む。
不可避のタイミングで撃ち込まれた銃弾により後ろに吹き飛ばされる影達。床に落下した影達を見てようやくその正体に気づく。

「何だこいつら・・・。」

レインが呆然と呟く。影の正体は犬型のB．O．Wだった。
元はシェパードやドーベルマンだったようだが、体の至る所からトゲのような物が出ており、足の爪は2倍ほどの大きさになっている。さらには両目が潰されているらしかった。

「驚いているようだね。この子達は“ハウンド”、私の傑作だ。」

「ハッ、大した傑作だなオイ！！」

たった今撃ち殺したハウンド達を見て馬鹿にしたように言うダン。
だが男は首を横に振ると、列車の貨物室の扉を開ける。

「いやいや、この子達は子供さ。彼らのね。」

貨物室からは2匹の巨大なハウンドが出てきた。
その大きさは2メートルを軽く超え、その巨大な口は人間一人の

頭を丸呑みできそうなほどだった。
２匹は男の所まで来ると立ち止まり、吠えることも無くただレイン達を睨んでいた。
その目からは何も感じられず、ただ冷たさだけがレイン達に向けられていた。

「紹介が遅れたね。私はこの施設の主任を勤めていたＪ・Ｔ・ハリーという者だ。彼らは“ハウンドマザー”という。」

ハリーは自分の両横で待機しているハウンドマザーの頭をゆっくりと撫でる。すると２匹は突然うなり声を上げつつ体を振るわせ始めた。
うなり声が遠吠えのような物に変わると、ハウンドマザーの体が何箇所も膨らみ、そこから先程倒した小型のハウンドが次々と生まれてきた。

「ええっ！？」
「嘘だろ！？」
「そんな・・・！」

レイン達がその光景を見て絶句する。床に落ちた小型のハウンド達は直ぐに立つとハウンドマザーの近くに集まり、うなり声をあげてレイン達を威嚇する。
ハリーはその様子を見て口の端を歪め、嬉々として自分の最高傑作を自慢する。

「この子達は“ハウンドベビー”。マザーからほぼ無限に生み出される従順なしもべだよ。」

ハリーは紹介を終えるとレイン達を指差し、まるで裁判官が判決

を下すかのようにハウンド達に指示を出す。
「さあ、皆さんと遊んであげなさい。」
「！！　来るぞ！！」
ハリーの言葉と共に既に数十匹もの数に増えていたハウンドベビーが一斉にレイン達に襲い掛かる。
「くそ！！」
「オラアアアアアア！！！！！」
ノルが悪態をつきつつＰ９０を連射する。その横でダンがＭ２４９を同じく連射しているが、ハウンドベビーは何匹倒しても次々と生まれ、次第に押されていく。
「どいて！！」
ラインが両手に持てるだけの手榴弾のピンを抜き前方に投げる。手榴弾は全てマザーハウンドの近くに転がっていった。
「皆伏せろ！！」
ノルの指示に全員が従い床に伏せると丁度爆発が起きた。爆音が轟き、周囲に集まっていたハウンドベビーが吹き飛ばされていく。
「・・・やったか？」
「怪我ぐらいはしてっだろ。」
「それはどうかな？」
周囲に広がっていた煙の向こうから平然とした声が聞こえてきた。

全員が驚いて声のした方を見ると、煙を平然と抜けてきたハリーとハウンドマザーの姿があった。

「そ、そんなバカな・・・。」
「あの距離でどうやって・・・・・・。」
「フフ・・・、私の後ろを見たまえ。」

ハリーの後ろを見ると、大量のハウンドベビーの死体が転がっていた。死体は不自然なほどに密集しており、その怪我も他のに比べ酷い物が多かった。

「さて、私達はどうやって凌いだと思う？」
「まさか・・・。」

ニーナがハウンドベビーの死体を見てある可能性に気づき愕然とする。

「あいつが何をやったか分かったのか？」
「ああ・・・、恐らく奴らはベビー達を集めて盾にしたんだ。」
「な、マジか！？」
「その通り。正解だ。」

ハリーはニーナを褒めるかのように乾いた拍手をすると、さらに補足をしていく。

「まあ、ハウンドベビーには私とマザーの安全を最優先にするよう作られているから、彼らは自ら盾になったのだがね。」
「つまり今のお前は丸裸だってことだろ！！！」
「そのワンコロと一緒にあの世に送ってやるよ！！！」

ダンとレインがそれぞれの銃をハリーに向けて撃つ。ケイトは銃口を向けられても動じないハリーに嫌な予感を感じる。
程なくその予感はハリーの後ろにいたハウンドマザーによって現実の物になる。
後ろにいたマザー達は引き金が引かれる直前にハリーの前に立ち、その身で銃弾を受け止めた。

「しゃあ！！　ざまぁみやがれ！！！」

ダンが銃弾がマザーに直撃したのを見てガッツポーズをする。しかしマザーは僅かに怯んだだけで、体に当たったはずの弾丸も皮膚に当たっただけで全く体に食い込んでおらず、潰れた弾丸が体からいくつも落ちていった。

「な・・・。」
「そんな、５．５６ミリ弾が効かないなんて・・・・。」

予想外のハウンドマザーの耐久性に呆然とするレイン達に対し、その様子を見てバカにしたような笑みを浮かべるハリー。

「・・・なら、これはどう！？」

ラインはＰ９０を右手一本で構え突撃していく。
だがラインが引き金を引く前にハウンドマザーが一匹動いた。
ラインが引き金を引いた時にはハウンドマザーは既に射線上から外れており、ラインがその後を追ってＰ９０を撃つがハウンドベビーよりもさらに早いマザーの動きに当てることが出来ない。
その時レインがふとハリーの方を見て、もう一匹がいないことに気づく。

「危ねえ！！！」

レインが気づかない内にもう一匹のマザーが近づいていたのに気づき、Ｇ３Ａ４を連射する。

５．５６ミリよりも威力・貫通性共に勝っている７．６２ミリ弾による銃撃には流石に耐え切れないのか悔しそうな声で吠えて下がる。

「いい反応だ。しかし、詰めが甘いようだよ？」

ハリーがそう評価するのとラインがマザーに体当たりを食らって壁に叩きつけられるのは同時だった。

咄嗟にＰ９０を盾にしたがマザーの体当たりはアッサリと銃を破壊しラインを吹き飛ばした。

「がはっ！！！」

壁に叩きつけられた後床に落下し、肋骨でも折れたのか血を吐いて倒れるライン。

「ライン！！！」

「ケイト手当てだ急げ！！！」

「分かってる！！！」

他の仲間がマザーを足止めしている間にケイトがラインの様子を確認する。幸い命に別状は無いようで、意識は無いようだが呼吸などはしっかりとしていた。

「命に別状は無いみたい！！　でも意識が無いわ！！！」

「くそ、ここに来てラインがいないのかよ！！！」

「弱音を吐くんじゃねえ！！！！　ぜってえ生き残るって言ったろ！！！」
「そういやそうだった！！！」
レインが弱音を吐くダンを叱咤し、ダンも勢いを取り戻す。
だがダンのＭ２４９が先程からの連射によってついに弾切れになる。
「ちいい！！！」
ダンが舌打ちしつつ体に巻いていた弾帯を装填しようとするが、その隙にハウンドマザーが近づいてくる。
「ダン逃げろ！！！」
ニーナがＰ９０を連射してマザーを追い払おうとするが、弾丸はマザーの体を掠るだけで止められそうに無かった。
「くそ！！！！」
ダンがようやく弾帯をセット出来た時には既にハウンドマザーが体当たりをしてくる所だった。
ダンが目を瞑り襲ってくるだろう衝撃に身構えていると、横から予想外に小さい衝撃が来たと思うと、体が横に倒され直前まで自分の体があった場所に何かがかなりの勢いで突っ込んできた。
ダンが不思議に思い目を開けると、マザーの体当たりを食らい吹き飛んでいるニーナが目に飛び込んできた。
「！？」

ダンが目を瞑った時横から襲ってきた衝撃はニーナがダンを突き飛ばしたのだ。そして彼女はそのまま突っ込んできたマザーの体当たりを食らってしまったのだ。
数メートル程吹き飛んだニーナは床に落ち、さらにしばらく転がった後ようやく止まった。

「ぐ、うううー・・・・。」

ニーナは口の端から血を流しつつ何とか立ち上がろうとするが、体に力が入らないのか何度手をついても立ち上がることが出来ない。

「ニーナさん！！？　ちくしょおおおおおおお！！！！！」

ダンが激昂し床に倒れたままＭ２４９を乱射するがハウンドマザーに致命傷を与えることは出来ず、マザーはハリーの下に戻っていった。
一方レインとノルももう一匹のマザーと戦っていた。

「くそ、もうＧ３のマガジンがねえよ！！」
「俺も大分少なくなってきた。」

レインとノルは背中合わせになって銃撃をし、マザーを寄せ付けないようにしていたが銃の残弾が無くなってきており、このままでは直に弾が尽きてしまう。

「安心するといい。その前に息の根を止めてあげよう。」
「うるせえ！！！」

レインがＧ３に最後のマガジンを叩き込みセミオートで銃撃を再開する。だが一匹に意識を集中し過ぎていたのか、気がつくともう

一匹のマザーがその大口を限界まで広げて自分に向かっていた。
回避も抵抗も出来ない状況で彼女に出来た事は、今この場にいない一人の少年に助けを求めることだけだった。

（助けて、ケン！！）

誰かが何か叫んだようだが、きつく目を瞑ったレインにはもはや何も分からなかった。

「レイーーーーーーン！！！！！！！」

ケイトが叫ぶが、叫んだところでどうしようもないことは分かっていた。だから彼女は間に合わないと分かっていても自分に何か出来ないかと自分の荷物を漁る。
その時、最後まで自分が持っていたので自分が持つことになった無線機を見て驚く。
無線機は大分前から誰かからの応答を受信していた。
この無線機へと応答できる周波数を知っているのは自分達以外にたった一人だけだった。

「くそ・・・、このぼろ雑巾が、動け・・・・！！」

ニーナは飛びそうになる意識を何とか繋ぎ止めつつ動こうとするが、体はほとんど動かせず、銃を構えることすら難しかった。
辛うじて動く首を向けると、ニーナの視界にそれが入ってきた。

丁度ニーナとレイン達の間にある出入口から黒い影がまるで旋風のようなスピードで出てきているのを。
黒い影は口元に獰猛な笑みを浮かべており、その笑みが見覚えのある顔なのに気づき、ニーナは自分の心の奥から様々な感情が湧き出てくるのを感じ、我知らず喜色満面の笑みを浮かべていた。

ノルはレインに食らいつこうとしているハウンドマザーに向けてＰ９０を撃とうとしたが、運悪く弾が切れていたらしく、銃からは乾いた音が出るだけだった。
ダンはもう一匹のマザーの相手をしていてもはや万事休すだと思い、それでも腰のＳＩＧＰＲＯＳＰ２００９を抜いて撃とうとした。その時、レインの背後に黒いロングコートを着て背中に巨大な銃らしき物を背負った全身黒ずくめの何者かが現れていた。

「誰・・・。」

ノルが喋り終わるよりコートで隠れていた腰の後ろにシャープエッジがあるのが見えるのが先だった。

レインが覚悟を決めて目を瞑っていると突然直ぐ近くで凄まじい音が響き、続いて何か大きい物が床に勢い良く落ちる音がした。

「な、バカな！！？」

ハリーの驚愕している声が聞こえる。レインが目を開けると、自分に向かってきていたマザーが離れた場所で立ち上がっている所だった。

「無事かレイン？」

直ぐ後ろから聞こえた声にレインは驚く。

その声は一番聞きたかった声だった。だがこの場にいるはずが無い、レインは頭の中でそう思い、けれど体は直ぐに後ろに振り向いていた。

そこにいたのは黒いロングコートを身にまとい、黒かった髪が金髪に変わり、目は黒目の部分が紅く染まっていたが、自分が待ち望んでいた少年に違いなかった。

「ケン！！！！」

レインが泣き笑いで彼の名を叫ぶと、死の淵から帰ってきた少年は片手を挙げてまるで久しぶりにあった友人に挨拶するかのように答えた。

「おっす。約束どおり戻ってきたぜ。」

第１５話：明けない夜は無い。（前書き）

さあ、ラクーンシティでの戦いもこの話で終了です。
どーんと読んじゃってください！
感想・評価待ってます！

第１５話：明けない夜は無い。

「ケン！！！」

レインが感極まった様子で健に抱きつく。その目からは喜びのあまり涙が出ており、レインがどれほど健の生還を望んでいたかを表していた。

「お、おいレイン、いきなり何を・・・。」

「うるさい、こんなに待たせた罰だ。」

レインは離れようとせず、むしろ腕にさらに力を込めて健を逃がさないかのようにする。

「無事だったのか！！」

「遅えぞこの野郎！！！」

ノルとダンも健の生還を喜び、それぞれ思い思いの言葉で健の生還を祝う。

「わりいわりい、ちょっとこいつの準備に手間取ってな。」

そう言って健は背中に背負っていた物を下ろす。

それは歪ながら銃の形をしていた。引き金は銃の上に取り付けられており、銃身上部には両手持ちのためか取っ手までついていた。

だが一番不自然なのは銃口の先についている４本の杭だった。ひし形に取り付けられた杭は真ん中にスピーカーのような物が付いており、どうみても銃としての機能はないようだった。

「何だコレ？」
「パイルバンカー（杭打ち機）の一種か？」
「まあ一応武器だ。名前は“デモリショナー”。対B・O・W用に秘密裏に作られてた物だ。」
「これがぁ？」

ダンが疑わしそうな目で見る。

「これが取り扱い説明書だから読め。こいつの凄さが分かる。」
「・・・文字が多くて分かりません！！」
「・・・・。」

ダンが説明書の文字の多さに直にギブアップしてしまい仕方なく使い方だけを簡単に教える。

「随分と余裕があるね！？　たかが一人増えた程度で！！！」

ハリーの言葉を合図としてハウンドマザーが一匹健に向かってくる。

「・・・てめえには仲間を傷つけられた礼をしねえとな。」

健は仲間を下がらせると、左手の手のひらに右手を細長い物を握っているかのように置き、そのまま何かを引き抜くかのように手を離す。
すると右手に剣の柄のような物が現れ、手から引き抜かれると左手から両刃の大剣が出てきた。
その場にいた健と気絶しているライン以外の全員が驚愕し、健はそれを無視して正面から向かってくるマザーに向き合う。
マザーは健の手から出てきた剣に驚くことなく向かってくる。そ

してマザーが体当たりの態勢に入った時、今まで動かなかった健が残像が出るほどのスピードでマザーに近づいたと思うと右手に握られていた大剣が突然消え、次の瞬間にはマザーの首が飛んでいた。

『！？』

あまりの速さに首が飛ぶまで何が起こったかすら分からず、健以外の人間はただ呆然とするしかない。

健はそのままスピードを落とすことなく首の無いマザーの横を通り過ぎつつ次々とマザーの体を輪切りにしていく。

健が立ち止まる頃にはハウンドマザーの体はいくつものパーツに分けられ地面に散らばっていた。その光景を見て開いた口が塞がらないハリー。

同胞を一瞬で殺されたハウンドマザーの反応は早かった。体から先程より早いスピードでハウンドベビーを次々と生み出し、健へと向かわせる。

健はその大きさに反して軽々と剣を振り回しハウンドベビーを真っ二つにしていく。

だがハウンド達の狙いは別にあった。何匹かのハウンドベビーは健に近寄ることなく、離れた場所で待機していたレイン達に向かっていく。

健はレイン達に向かうベビー達を阻止しようとしたが、自分の方に来るハウンドベビーのあまりの数に迎撃に精一杯となる。

「ダンそいつを撃てえ！！！」

「お、おう！！」

ダンはしっかりと構えると引き金を引いた。

銃口のスピーカーから高周波の音が出された。その音は４本の杭に接触し共鳴によって、その音は物質の結合を緩め、前方にある全

てのものを分解し破砕する衝撃波に変わる。
衝撃波は前方に大きく広がり、効果範囲にいたハウンドベビー達は体組織を細胞レベルで破壊され体中から血を撒き散らしつつ吹き飛ばされていく。

「やばっ！！！」

健は衝撃波が自分の方に来ると分かると目にも止まらぬスピードで移動しそれを回避する。

「アブねーだろーが殺す気か！！！」
「バカ野郎こんなに威力があるなら先に教えろ！！！」
「まだ使ってなかったから分からなかったんだよっと！！」

健はダンに文句を言いつつ近くのハウンドベビーを3匹まとめて切り払った。
続いて後ろを向くと大剣を振り上げ飛び掛ってきたハウンドベビーの頭を真っ二つにし、さらにその勢いを殺さずに剣を振り回す。
かなりの大きさを誇る大剣は振り回す時に発生する風すら武器に変えてハウンドベビーを葬っていく。
大半のベビー達は大剣にぶった切られ、かろうじて切られなかったものも剣風によって壁に叩きつけられ致命傷を負っていく。

「おおおおおおおお！！！！！」

ダンはデモリショナーで近くのベビー達を蹴散らしつつハウンドマザーに向かっていく。

「喰らいな！！！」

デモリショナーの有効射程にマザーが入ると躊躇うことなく引き金を引いた。
しかしマザーの耐久度はかなりのものらしく、僅かに血が噴出してはいるものの致命傷には程遠かった。
ダンはその様子を見て不適な笑みを浮かべると銃身の横に付いているレバーを引く。レバーが引かれると銃口の杭がさらに伸び、先端に穴が開く。

「マッサージが嫌なら注射をしてやるぜ！！！」

ダンはマザーが衝撃波の余韻で動けなくなっている間に杭を深々と突き刺す。マザーはたまらず吠え、その声を聞いてハウンドベビー達が集まってくる。
しかしその前に健が立ちはだかる。

「行かせるかよ！」

健はさっき大剣を取り出したときとは逆の手順を行い大剣をしまうと素手でベビー達に立ち向かう。
正面から来た3匹は目に映ることすらない神速のパンチによって一瞬で頭部を破壊された。
ハウンドベビーたちは一斉に健に襲い掛かったが、健の全方位に及ぶマシンガンのようなラッシュによって全て叩き潰されてしまった。
その間にダンはデモリショナーの引き金を引いていた。
体内に直接叩き込まれた振動波はマザーの体を完全に破壊した。
ダンが杭を引き抜くとマザーはゆっくりと倒れ、床に血だまりを作っていった。
丁度そのとき健も残りのハウンドベビーを片付けたところだった。
2人は顔を見合わせるとどちらからともなく笑い合い、ハイタッチ

をした。

「ナイスアシスト。」

「ナイスアタック。」

互いを健闘し合う2人。その光景に水を差す声が響いた。

「な、何故だ！！　何故私の完璧なハウンドが負けるのだ！？」

ハリーの慌てぶりに健は静かに彼の敗因を告げる。

「確かにお前が作ったものは凄かったよ。でもな・・・。」

健はそこで一呼吸置く。

「戦いで勝敗を決めるのは信念の強さなんだ。そんな魂の無いガラクタじゃ、俺達の信念は殺せないんだよ。」

静かに告げられた健の言葉にハリーは何も言い返せない。

悔しそうに唇を噛みながら立ち尽くしているハリーを一瞥すると健は仲間の元に向かう。だがそのときハリーが健に怨嗟の声を放つ。

「まだだ・・・、まだ負けではない！！！！」

ハリーはポケットから何かのスイッチを取り出すとそれを思い切り押す。

するとダンが殺したハウンドマザーの死体が動き出した。

「！？」

「な！？」

それを見たダンとノルが驚いていると、健は細切れにしたハウンドマザーの死体からいくつもの触手が伸び、もう片方のマザーへと向かっていく。

「手前え！！　一体何をしやがった！！！」

健はハリーを睨みつけるとこの異常事態について問いただす。

ハリーは壊れた笑い声を発しながら説明する。

「ふふふ・・・、ハウンドのリミッターを外したのだよ・・・。」

「リミッターだと！？」

「本来完成度の高いB．O．Wには暴走の危険が無い様にリミッターが取り付けられている。だが私は今それを外した！　貴様らを殺すために！！！」

「このイカレ野郎が・・・！！」

レインがハリーに向けて銃を向けたが、引き金が引かれる前に健がそれを阻止する。

「なんで邪魔すんだケン！！」

「あいつは殺す価値も無い。　そんなことより全員でとっとと脱出するぞ。」

「けど！！」

「お前を人殺しにしたくないんだ。・・・頼むよ。」

そう言って健は悲しそうな目をレインに向ける。レインはその目を見て少しの間逡巡した後銃を下ろす。

「・・・分かったよ。」
「・・・サンキューな。」

レインが落ち着きを取り戻すと健は皆に指示を出していく。

「ノル、あの列車動かせるか？」
「多分何とかなるぞ。」
「それじゃあノルは列車を動かすのを頼む。レインはノルのサポートに回ってくれ。」
「分かった。」
「任せろ。」

２人は健の指示が出るとすぐに列車へと向かっていく。

「ダン、お前はあれを見張っててくれ。」

健はハウンドマザーを指差す。バラバラの死体から伸びた大量の触手がもう一方のマザーに幾重にも絡み付きまるで繭のようになっていた。繭は僅かに躍動しており、しばらくしたら何かが生まれてくるような雰囲気だった。

「俺があ？」
「俺以外で一番強力な攻撃方法持ってんのはお前なんだ。仕方ないだろ。」
「・・・しゃあねえな。」

ダンは頭を掻きつつ繭を見張るため繭の近くに移動する。
健は３人に指示を出し終わると怪我人を列車まで運ぶため手当てをしているケイトの元に向かった。

「健、遅いわよ。」

ケイトは壁にもたれさせているニーナとラインの手当てをしつつ、怒りを混ぜた口調で健に文句を言う。

「え～と、ごめん。」

健もケイトが怒っているのに気づき素直に謝る。

「まあ・・・そのくらいにしてやれ・・・。」

「・・・しょうがないわね、約束は守ったから許してあげる。」

ニーナが仲裁に入るとケイトは矛を収め、2人の手当てに専念する。

「2人の怪我はどんなもんだ?」

「ニーナは肋骨が3本折れててヒビが入ってるのもあるわ。内臓にも少しダメージがあるみたい。戦闘は無理ね。」

「こ、これくらい平気だ・・・。」

ニーナは大丈夫そうに振舞おうと立ち上がるが、痛みで足に力が入らず倒れそうになる。

健は素早く近寄るとニーナの体を支えた。ニーナは突然のことに驚き、目を見開いていた。

「無理すんな、後は任せて大人しくしてろ。」

健はゆっくりとニーナを壁にもたれさせると、今度はラインの様子を聞く。

「ラインのほうは？」
「・・・内臓は確実に損傷してるし、壁から落ちたときに左の鎖骨を損傷してる。銃でガードした時に指も何本か折れてるわ。」
「結構酷いな・・・。」

健は未だに意識を取り戻さないラインを見て呟く。彼女は体中に包帯を巻かれており、特に指に巻かれた包帯は折れた場所が膨らんでいた。
怪我の具合を聞いた健は2人は自力での移動は無理だと感じ、2人を両肩に担ぎ上げた。

「お、おい。」
「苦情その他は一切聞きません。　ケイト行くぞ。」
「分かってるわよ。」

健がそのまま列車に向かおうとしたとき、ダンの切羽詰った声が聞こえてきた。

「オイ健やべえぞ！！」

健がダンを方を振り向くと、ハウンドマザーが入っている筈の繭に亀裂が入っており、そこから何かが見えていた。
健の第六感はそれを見た瞬間あることを告げた。
災厄が生まれる、と。

「ダン撃てえ！！！」
「任せんしゃい！！」

ダンがデモリショナーを撃つのと、繭の亀裂から無数の触手が出るのは同時だった。

触手は振動波によってすぐに迎撃されていく。健はその間に2人を担いだままケイトと一緒に列車へと駆け出す。

「くそ、数が多すぎだぜ！！！」

ダンは触手のあまりの多さにゆっくりと後退していく。次第に繭とダンの間の距離が広がっていき、振動波の有効射程外から触手が列車に乗り込もうとしている健達に向かって伸びる。

「！？　しまった！！」

ダンが己の失策に気づき健達に向かう触手を迎撃しようとするが、目の前も繭から際限無く伸ばされる別の触手がそれを許さなかった。

「健！！凄い数の触手が！！」

「ああくそもう少しなのによお！！！」

健はケイトを背後に隠すと、体からいくつもの触手を出し、向かってくる触手を全て打ち払っていく。

「健その体・・・。」

「今聞くことじゃないだろう！」

ケイトが健の体について聞こうとするが、ニーナがそれを制する。

「・・・街から出たら説明しなさいよ。」

「分かってる。」

健は自分の触手で3人の安全を守りつつ、ニーナとラインを担いだまま先頭車両の中に入る。

中は様々な管や列車を動かすための機材によって狭かったが、ある程度のスペースが確保されている真ん中に2人を下ろした。
ちょうどその時運転室からノルとレインが出てきた。2人は健の体から出ている触手を見て驚愕するが、健に問い詰めたりはしなかった。

「・・・ノル、列車の方は？」
「すぐに出発できる。案外簡単だった。」
「よし、俺はダンと一緒にアイツを何とかするから、頃合を見て列車を動かしてくれ。」
「分かった、そっちは任せるぜ。」
「おう、任しとけ。」

健は列車から飛び出すと繭から無限に出てくる触手を必死に蹴散らしているダンに加勢する。

「オラレスキューが到着したぜ！！」
「おおサンキュってなんだよそれ！？」
「実は体にGウイルスを打ち込んだんだ！　おかげで細胞を自由自在に変化させて触手にしたり簡単な構造の物だったら作り出せるようになっちまった！！！」
「なんか凄い羨ましいぞそれ！！　俺にも分けろ！！」
「出来るか！！」

健がさりげなく言った爆弾発言にもダンは動じず、健を一緒に向かってくる触手を衝撃波で吹き飛ばしていく。すると突然、触手による攻撃が止んだ。

「！　今だ！！」

ノルはこの瞬間を好機と見て列車を発進させる。突然発車し始める列車を見て驚く2人。

「おいなんか列車が動いてねえか？」
「やばい早く乗るぞ！！」
「置いてかれんのはごめんだぜ！？」
「全くだ！！！」

ダンと健は急いで攻撃を止めて列車へと向かう。
先頭車両の入り口に2人が飛び込むと、列車はすぐにプラットホームから離れていく。完全にプラットホームが見えなくなると全員がほっとしたように大きく息を吐いた。
ようやく、悪夢が終わる。
全員がそう思い、今までずっと張り詰めていた体からようやく力を抜く。

「はあ～～～。やっと終わったぜえ・・・。」
「つ、疲れた・・・。」
「私は早くシャワーを浴びて眠りたい・・・。」
「アタシも・・・。」
「俺はとっととベットに飛び込みてえよ・・・。」

まだ意識が戻らないラインを除いたほとんどが疲労を訴えている中、ケイトだけは険しい目を健に向けていた。
健はケイトが何を言いたいのかをしっかりと分かっていた。

「・・・俺の体についてか・・・。」
「・・・説明するって言ったでしょ。」

他の者も聞きたかったことらしく口を挟むことは無かった。

健は諦めたように息を吐くと、右手を顔の前にまでもってきた。
皆が健の行動に首を傾げていると、突然健の右手が変化していった。

「え！？」
「な！！」

皆が驚く中健の手はどんどん変化していく。指先は鉤爪のようになり、手はまるで鉱物のような見た目に変わっていく。
手が完全に変化し終わると、今度は着ていたコートが体に溶け込んでいくかのように体と同化していく。
一同があまりの非現実的な光景に呆然としていると、健は種明かしを始めた。

「・・・俺はハンター達の大群と戦った後、重症を負いながらあそこのフロアを彷徨っていた。その時、偶然にも「対B．O．W武器研究室」と書かれた部屋を見つけたんだ。・・・俺は躊躇うことなくその部屋に入って、そしてある物を見つけたんだ。」
「ある物？」
「・・・この街にウイルスが蔓延する原因となったモノ・・・。」
「！？　日記に書かれていた新型ウイルスか！！」

ノルがそのことに気づき愕然とする。健はそれを聞いて頷くとさらに続きを話していく。

「それはここの研究者がさらに改良を加えたもので、もう少しで出血多量で逝っちまう俺にとっては、それに賭けるしかなかった。」
「・・・打ち込んだのか、体に・・・。」
「ああ。賭けはなんとか成功して、俺の怪我は全て完治。さらにはこんなオマケまでついてきた。」

そう言うと健は先程消したコートをまた出現させ、さらには先端が鋭く尖っている尻尾まで出現させた。
だがそれを見てなんらかの反応を示す者はいなかった。
健は仲間を守るため、そして約束を守るために人間を捨てたのだ。誰だって素直に喜ぶことは出来なかった。

「勘違いすんなよ。」

だが健はそんな自分を憂うことなく、それどころか逆に笑みを浮かべていた。

「俺は自分の意思でこうなったんだ。お前らが気にすることじゃねえぞ。」
「でも・・・！」
「それに、別に体を好き放題変えられるだけで他は大したことはねえんだ。そう悲観するほどでもないぞ。」

健は本心からそう言っていた。他の仲間は彼の心境を読みきれないでいる。
だが彼が人間を捨てたことにこだわっていないことは感じ取れたのか、皆これ以上は何も言わなかった。

「・・・まあ健がいいっていってるんだし、かまわねえんじゃねえのか？」
「・・・それもそうだな。」

皆健を信頼しているからこそ何も言わなかった。そして健も仲間を信頼しているからこそ自分の体を話したのだ。ここでの余計な詮索は彼の信頼を損なう・・・、皆そう思ったのだ。

「フフフ・・・、いいことを聞かせてもらったよ。」

そのとき、後部車両へと続く扉からグロック１９（９ミリ口径、装弾数９発）を構えたハリーが現れた。既に目は血走っており、半ば狂気に取り付かれているような感じだった。

「てめえ、いつの間に！！」

「そういやいつの間にかいなかったな・・・。」

「存在感無いんじゃ・・・。」

健達が口々に好き勝手喋ろうとするのをハリーが天井に向けて発砲して止めさせた。

「まさかGウイルスがあったとはな・・・。ククク、早く私の手で最高のモノに仕上げなければ・・・。」

「多分無理だと思うぜ・・・。」

ダンがハリーの後ろを見て若干顔を青くさせながら呟く。他の仲間もハリーの後ろを見て何故か後ずさりしている。

「？」

ハリーが不審に思い後ろを向くと、後部車両が肉の塊で埋まっているのが目に飛び込んできた。

「な、何だコレは！？」

ハリーが驚愕するのと、肉の塊から触手が伸びて彼の体を貫くのは同時だった。

そのままハリーは触手に絡め取られ、肉の塊へと引き寄せられる。

肉の塊が突如盛り上がり、そこからハウンドマザーの大きな顎が現れ、ハリーを食おうとする。
その光景を見て口から血を吐きながらも慌てて止めようとする。
「ま、待て！！　私はお前の主だ・・・！？」
末期の声はそのまま噛み砕かれた。

「くそ、もう少しなのに・・・！」
「嫌なサプライズだなオイ！！」
健とレインが悪態をつきつつシャープエッジとコルトガバメントを肉の塊となったハウンドマザーへと連射するが、相手が大きすぎるためほとんどダメージが無かった。
「くそ、あんなのどうやって倒せっつーんだよ！！！」
「ダン、そいつは！？」
「ダメだ、充電中らしくてうんともすんとも言わねえ！！」
ダンがデモリショナーを使おうとするが、先程の戦闘でバッテリー切れになったらしく、起動しなかった。
「もう弾薬は尽きかけているぞ！　どうする！？」
「アレを外に出すわけにはいかないだろ。倒すしかねえよ！！」
そう言うと健は足からいくつもの触手を出して床に突き刺し、体

を固定していく。
そして右腕を前に突き出すと、右腕から銃口のような筒が現れた。
「皆、３０秒だけ俺をバックアップしてくれ！！！　あの贅肉の塊をこの世から抹殺してやる！！！」
健の呼びかけに全員が答える。
「上等だ！！　お前に賭けるぜ！！！」
ノルがＰ９０のマガジンを入れ替える。
「俺も乗った！！」
ダンが２丁のＭ９３Ｒを構えて次々に来る触手を撃ち落す。
「私は君を信じる！！」
ニーナは床に座り込みながらＨ＆ＫＵＳＰを構える。
「アタシはケンを信じてるからな！！！」
「私も！！」
レインとケイトが健の横に並び、健に近づく触手を全て迎撃していく。
「・・・私を忘れないで。」
ラインが満足に動く右腕でＳＩＧＰＲＯＳＰ２００９を構えている。

全員の返事をしっかり聞き取ると、健は不敵な笑みを浮かべる。
「おし！　これで終わらせるぞ！！！」
『オオ！！！！』

１０秒後・・・。
「オオオオオオオオオオオオ！！！！！」
健は右腕の銃口に空気をどんどん集め圧縮していく。
「しつこいぞてめえ！！」
「いい加減触手プレイは飽きたってってんだよ！！！」
ダンとノルが悪態をつきつつ互いに向かってくる触手を迎撃していく。

２０秒後・・・。
「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」
銃口に圧縮された空気が高温を放ち始め、次第に健の体も熱を帯び始める。
「もうコルトの予備弾倉ねえぞ！！」
「私のが１丁余っているぞ！！」

ニーナが使っていなかった方のＵＳＰを数本のマガジンと一緒にレインに投げる。

「サンキュ！！」

レインはニーナに礼を言いつつコルトからＵＳＰに持ち替えて銃撃を再開する。

そして３０秒後・・・。

どんどん圧縮されていく空気がしだいにプラズマ化していき、健の右腕の銃口には１万度以上もの高温が蓄積されていく。

その高温によって健の体は至る所から煙が出ており、右腕に至っては腕が赤熱化していた。

しかしそれでも健は倒れなかった。

「よし！！皆、運転席まで下がってくれ！！！　コイツは加減が利かないから近くにいると死ぬぞ！！！」

「！？分かったわ、皆下がって！！」

ニーナとラインは他の仲間の手を借りて、全員が運転席の入り口まで下がると健は相手を見据える。

相手も健が何かしようとしているのを感じたのか、猛烈な勢いで触手を繰り出していく。

全身に猛烈な激痛を感じつつも健は腕を構えたまま動かない。

そして触手が健の全身を貫いたとき、健は目の前も化け物に向けて最後の言葉を告げる。

「・・・悪いな。俺には大事な仲間がいるからよ・・・。」

腕の銃口から眩い白光があふれ出す。それは目の前のあらゆる物を燃やし尽くす裁きの光。
・・・悪しき者を滅ぼす、竜の息吹（ドラゴンブレス）。

「てめえなんかに殺される訳にはいかねえんだよお！！！！！！」

発射されたプラズマ砲（キャノン）はハウンドマザーの膨張した体がぎっしり詰まっている後部車両をまるごと吹き飛ばした。
ハウンドマザーは一片の肉片も残さず、宣言どおりこの世から消滅した。

「すげえ・・・。」
「まさか生身でプラズマを撃ち出すなんて・・・。」
「後部車両が無えぞ・・・・・。」
「ハア、ハア、ハア、ハア・・・・。」

健は全身から湯気のようなものを出しつつ床に手をついている。
余程体力を使ったらしく、呼吸が一向に戻らない。

「大丈夫！？」

ケイトが飛びつこうとするのを健は片手を上げて制止する。

「今は・・・、体が高温になってる・・・。触ると・・・、マジでヤバイ・・・。」

そう言うと健は急に力を無くし倒れてしまった。

「！？ケン！？」

「おい大丈夫か！？」

突然のことにレイン達も急いで健の下に駆け寄る。

健は辛うじて意識を保っているが、今までの疲労もあったのか声は消え入りそうなほどに弱かった。

「悪い・・・、疲れたんで寝てていいか？」

「おう、ゆっくり休んどけ。」

「・・・お休みなさい。」

「お疲れさん。後は任せとけ。」

ノル、ライン、ダンの返事を聞いて目を瞑る健。

意識が消える前にニーナ、ケイト、レインの声が聞こえた。

「・・・ありがとう。君は私の恩人だ。」

「大好き、健。」

「・・・アタシはずっと、アンタの側にいるからな。」

ゆっくりと意識が闇に沈んでいく中、健はどこか満足げな表情を浮かべた。

（・・・俺は、自分の正義を、信念を貫けたのだろうか・・・。）

ぼんやりとした頭で最後にそう考えると、健の意識は深い眠りについた。

次に起きたときに、きちんとレインが近くにいることを願って・・・・。

第１５話：明けない夜は無い。（後書き）

ラクーンシティから脱出しましたが、後２話ほど書く予定です。
最後までこの未熟な作者にお付き合い下さい。

最終話：明日へ向かって。

ラクーンシティから少し離れた病院。その一室で、1人の少年が目を覚まそうとしていた。

「ん、うん・・・。」

少年はゆっくりと目を開いた。最初に視界に入ったのは真っ白な天井で、ここがどこなのか、少年には分からなかった。

「ここは・・・・痛！？」

少年は起き上がろうとしたが、少し動かしただけで全身に激痛が走るため、少年は起きるのをやめた。それから状況を把握しようと周囲を見ると、自分のベットに仲間が突っ伏して眠っているのに気づいた。

レイン、ケイト、ダンの3人は、少年・・・健が起きているのにも気づかず、ぐっすりと眠っていた。

さらにこの部屋の別のベットにはニーナとラインも眠っていた。

健はノルの姿も探そうとしたが、丁度入り口からノルが入ってきた。

「お、起きたか？」

「ノル・・・・。」

健は自分の仲間が全員無事だったことに安堵する。

健はそのままノルに質問をしようとしたが、ノルが片手を上げてそれを止める。

「色々と聞きたいだろうが、まずは順を追って説明する。いいな？」
「分かった。」
健が頷くと、ノルは健が意識を失ってからのことを話し始めた。
「お前が気絶してからしばらくして、俺達はラクーンを脱出した。その後、街を封鎖していた米軍に見つかって保護され、全員感染してないか確認をとった後この病院に運ばれたんだ。」
「・・・俺は大丈夫だったのか？」
「ああ。血液検査でも発見されなかった。俺らは内心びびったけどな。」
「見つかってたら今頃実験材料だな。」
「お前なら自力で逃げるだろ。」
「あたぼうよ。」
ノルと健は声を抑えて笑い出し、しばらくその場には2人の忍び笑いが響いていた。
しばらく笑うと、健は気になっていたことを尋ねた。
「ところで、ラクーンシティはどうなったんだ？あれじゃ一生元に戻らないだろ。あそこから各地にウイルスが蔓延すり危険性だってあるんだしよ。」
「・・・その心配はもう無い。」
「？何でだ？」
「街はミサイルによって吹き飛ばされた。」
「な！？　ホントか！？」
「ああ。テレビでもやってる。街は地図から消えたよ。」
「マジかよ・・・。」
健は頭を抱えて呟く。これではアンブレラが行っていたことも全

て吹き飛んで、証拠なんて残らないだろう。

「奴らは悠々とお日様の元をこれからも歩いてくってのか・・・。」

「それは分からんぞ？」

ノルは健の思考を読み取ったかのように答える。

健が怪訝そうな表情を返すと、ノルは苦笑しつつ部屋のテレビを付ける。

テレビには元アンブレラの研究員だという女性がアンブレラの人体実験について語っていた。

健が驚愕の表情を浮かべると、ノルは説明する。

「俺ら以外にも脱出した奴ってのはいてな。その内の何人かはアンブレラについて知っているらしくてな。そういう奴らが集まってアンブレラを潰そうと頑張ってるらしい。」

「そうなのか・・・。」

健は未だに驚きを隠せず、テレビを食い入るように見ている。

その時、今まで眠っていたレインが目を覚ました。

「あ、起こしちまったか？」

「ん・・・ケン？」

レインが寝ぼけ眼で健を見る。最初はぼーっとした目だったが、健が目覚めていることに気づき、完全に覚醒すると健に抱きついた。

「お、おいレイン・・・。」

健はレインを離れさせようとしたが、彼女の顔を見てしまい、けっきょくされるがままになった。

・・・レインの顔には涙の跡が残っており、目もよっぽど泣いたのか真っ赤になっていた。　恐らく自分がいつまでも起きなかったからこうなったのだと思い、健はレインを離れさせるのをやめたのだ。

「・・・心配かけたな。」

「・・・ほんとに心配したんだぞ・・・。いつまでたっても中々起きないし、医者は「もしかしたら一生起きないかもしれない。」とか言うし・・・。」

段々と声が震えていくレイン。位置的に顔が見えない健には、怒っているのか泣いているのか分からなかった。

「ああ、あの時は大変だったぞ。レインがキレて医者に殴りかかるし、ニーナとラインは医者を脅し始めるし、ケイトは無言のプレッシャーでその場を凍らすしな。」

「よ、余計なことを言うな！！」

ノルがその時を振り返ると、レインが顔を真っ赤にしてそれを遮る。その際にノルの方へ振り向いたため、健は彼女の顔を見ることが出来た。

レインは泣いていた。

それを見て、改めて申し訳なさを感じる健。

「・・・本当に心配かけちまったな・・・。」

「・・・起きたんだから許してやるよ。」

「ありがと・・・！？」

それ以上健は喋ることが出来なかった。何故ならレインの唇が健の唇に重なり、彼の口を塞いでいたからだ。

キスをしていたのは数秒ほどだったろうか。その間健は突然のことに対処できず、固まったままだった。
しばらくして唇を離したレインは、顔を真っ赤にしながら口を開く。

「お、起きるのが遅かったから、その、つい・・・。」
「ひゅーひゅー。大胆だねレイン。」
「う、うるさい！！！」
「ぶご！！！」

ノルが冷やかすとレインに殴られ、そのままマウントポジションになりボコボコにしていく。

「忘れろ！！　今見たことは全部忘れろお！！！」
「聞こえてねえよ・・・。」

ノルは既に意識を失っていたが、そんなことにも気づかずレインは拳を何度も叩き込んでいく。

「はあ・・・はあ・・・。」

レインが正気に戻る頃には、壁一面に血が飛び散り、ノルの顔面は完全に原型を留めていなかった。

「う、うん・・・・。」
「・・・うるさい。」
「何だか騒がしいな・・・・・。」
「ん、何だ？」

レインとノルが騒いだことにより、他の皆も次々と起き上がって

いく。

「あれ・・・健？」
「・・・起きてる。」
「ま、マジかよ！」
「こ、これは夢じゃないよな？」
「現実に決まってんだろ。」

たった今起き上がった面子は信じられないものを見るかのような反応をしていたが、健の不機嫌そうな声で、これが現実だということを確信した。
そして、歓喜の声を一斉に上げる。

『健！！！！！』
「おっす、おはよーさん。」

その後、しばらく病室はケイトが健に抱きついたり、ニーナとライインがベットから起きようとして健に止められたり、ダンが喜びのあまり踊り始めてレインに殴られたりと、容態を見に来た医者が止めるまで病院全体に響くような大騒ぎとなった。

5日後。
動けるぐらいにまで回復した健は空港にいた。

「・・・もう行くのか？」
「ああ、いい加減帰らねえと家族に心配かけちまうからな。」

健は入院している間、国際電話で日本にいる家族に無事を連絡したのだが、その際戻ってくるよう言われたのだ。

「もう少し居たって・・・。」
「せめて私達が完治するまで待ってくれないか？」
「・・・お願い。」

見送りにきた面子の中で、未だに怪我が完治していないニーナとラインが健の帰国を思いとどまらせようとする。ニーナはまだ肋骨が完全に繋がっておらず、ラインは左腕を吊っており、指にも包帯が巻かれていた。
だが、健は首を横に振ると少し悲しそうな雰囲気になりつつ話して行く。

「・・・悪い、あっちの家族にこれ以上心配かけたくねえんだ。」
「・・・しょうがねえなあ。」
「こいつがここまで言ってるんだ。ここは何も言わず見送ってやろうぜ。」

ダンとノルは既に納得しているらしく、引き止めたりはしなかった。
2人の言葉に、健を留まらせようとしていた4人も引き下がった。
その場の空気が一気に重たいものに変わったのに気づき、健は話題を変える。

「ところで、お前らこれからどうするんだ？」
「これからか？」
「レイン何か決めてる？」
「アタシは特に無いなあ・・・。」
「・・・私も・・・。」
「あ、俺警官になろうかと思ってる。」
「お前があ～～～？」
「わ、わりいかよ！！！」

『似合わねえ。』
「お前ら人を傷つけて楽しいかあ！！！！」

ダンの叫びに全員が爆笑し、場の空気が明るいものに変わる。
その光景を見て、健は改めて思った。

「お前らに会えて本当に良かったよ。」
「何言ってんだ！！アタシらだってそうさ！！！」
「健や皆に会えて、本当に良かった。」
「俺もそう思うぜ！！！」
「私もだ。君達に会えて良かったと、心から思う。」
「・・・私も、仲間に会えた・・・・。」
「俺だってそう思ってるぜ？」

全員が同じ思いだった。皆この仲間に会えたことは、何物にも変えられぬ宝物だと、そう感じるほどに彼らの絆は強くなっていた。
もし1人でも欠けていたり、違う人間だったらここまで強い絆は出来なかっただろう。
その時、日本行きの飛行機が後１０分で飛び立つアナウンスが聞こえてきた。

「お、そろそろ行かなきゃな。じゃあ皆、また会おうぜ！！！」

健は乗り込み口へと向かいながら仲間へ大きく手を振る。

「たまにはこっちに来いよ～～～！！！」
「連絡いれろよーー！！！」
「手紙でもいいからねーーー！！！」
「そちらに言ったら案内を頼むぞーーー！！！」
「またね・・・」

「元気でやれよーーー！！！」

仲間からの声を受け、健は会心の笑みを仲間に向けると走り去った。健の背中が見えなくなると、レイン達は互いに顔を向ける。

「さてと、アタシ達も行くとしますか。」
「そうね。」
「私は病院に戻るだけだがな。」
「・・・私も。」
「俺は勉強でもするかな。」
「俺も付き合うぜ。どうせやることないしな。」
「お、じゃあ2人でＦＢＩでも目指そうぜ。」
「アタシはあんたが勉強できるかどうかが不安だな。」
「ひでえなお前！！」
「ごめん、私も思った・・・。」
「ケイトもかよ！？」

いつまでもくだらない話をしながらレイン達は空港を去っていった。彼らに寂しさは無かった。いつか会える、そう信じているからだ。

いつか来る再会の日を夢見て、レイン達は歩いていく。

現地時間午前１０時。日本のとある家。
平日であるにも関わらず、そこには家族が全員集まっていた。
・・・ただ１人を除いては。
家のリビングで椅子に座り、普段から険しいと言われる顔をさらに険しくしているのは、この家の主である平山源蔵（ひらやまげんぞう）。
その隣に座っているのは源蔵の妻である平山真知子（ひらやままちこ）。
リビングのソファーで大きな熊の人形を抱えつつ不安そうな顔をしているのは家族の長女である平山麻衣（ひらやままい）。
彼らは１ヶ月前にアメリカに家出し、ラクーンシティに行って事件に巻き込まれた末息子の帰りを待っているのだ。

（健、まだかな・・・。）

電話で無事を言ってきてから既に数日が経っているが、それから連絡は途絶え、こうして彼が帰ってくるまで家族皆で待っているのだ。
彼の姉であり、生まれたときから弟の面倒を見てきた麻衣は、不安で押しつぶされそうになりながらも、それを必死で押し込んで待っていた。
最愛の弟の帰りを。

ピ～ンポ～～ン。

（また郵便かなにかかな・・・。）

今日になってから3度目の玄関のチャイムに、家族は誰も出ようとしなかった。
そのとき、玄関の扉が開けられる音がした。
「ただいま〜〜。」
何事も無かったかのようにただいまを言う人物の声に、いち早く反応したのは麻衣だった。人形を放り投げ、玄関へと飛び出す。
玄関には、待ち望んでいた弟の姿があった。
「あれ、麻衣姉？　大学はどうしたんだよ。」
目の前にいる弟・・・平山健は、自分の姉が平日にも関わらず家にいることに驚いていた。
「・・・。」
「ま、麻衣姉ぇ？なんで無言なんだ？」
健が不安そうに聞いてくるが、麻衣の耳には届いていなかった。
彼女は弟に飛びつくと、ありったけの力で弟を抱きしめる。
もう2度と、いなくならないように。
そして彼女は、涙を流しながら震える声で告げる。
「お帰り、健・・・。」
「・・・ただいま。」
こうして、人を捨てた少年は我が家へと帰る事が出来た。
彼はこれからいくつもの困難にぶつかり、いくつもの試練を味わうことになる。

しかし、彼は決して倒れることはないだろう。諦めることはないだろう。

彼には仲間がいるから。守るべきものがあるから。決して止まる事はないだろう。

それが、彼の信念なのだ。

最終話：明日へ向かって。（後書き）

これにてこの話はおしまいです。
最後に裏話と次回予告を書いた話を書くので、どうかそれも見てください。

おまけ：次回予告

作者：「いや～～やっと終わったよ～。」
健：「おつかれさん。」
レイン：「で、今回はなにやるんだ？　もう本編は終わったんだろ？」
作者：「今回はキャラを集めて座談会みたいなのを開こうと思ってな。」
ケイト：「この小説の裏話とか？」
ダン：「ああ、俺は最初悪役だったとかの話か？」
ノル：「そんな予定があったのか！？」
作者：「あ～、最初は仲間内に悪党入れといた方が健をカッコ良く出来るかと思ったんだ。」
ニーナ：「でも途中で変えたのだな。」
ライン：「・・・無計画。」
作者：「言わないで！！　気にしてるから！！」
健：「俺達の名前も適当に付けたんだろ確か？」
作者：「俺の頭の中のイメージで合いそうなやつを付けたんだ。その場で。」
ダン：「適当だな。」
ケイト：「ホントにね。」
ノル：「・・・それ以上はやめてやれ。作者がいじけて床に座り込んでる。」
作者：「どうせ俺はノープランだよ・・・。」
ニーナ：「英語で言うな。昔いたバンドの名前になる。」
ライン：「・・・早く進めろ。」
健：「ライン銃を突きつけるのは止せ・・・。」
レイン：「そうだぞ。どうせならコイツで・・・。」
ダン：「デモリショナーなんてもってのほかだ！！！」

ハリー：「その通り。そんなのは放って置いてさっさと進めるに限る。」
ハウンドマザー：「ワン！！！」
健：「なんでお前らがいるんだよ！！！」
ハリー：「作者の力で復活したのだよ。」
ニーナ：「・・・確か肉片も残ってなかった筈では・・・・。」
作者：「細かいことは気にするな。」
ノル：「お、復活した。」
ケイト：「じゃあ早く進めましょう。」
作者：「ああ。つうわけで次回予告で～す。」
ハリー：「それは最後にやる予定では無かったのか？」
作者：「なんか予想以上に扱いが難しい奴等だから、収拾つかなくなる前に終わらすことにした。」
レイン：「な！？　ふざけんな！！」
麻衣：「そうよ！！私もきちんと出しなさいよ！！！」
源蔵：「ワシを出さないとはいい度胸だな・・・！」
真知子：「ふふふ、お仕置きが必要なようですね・・・。」
健：「親父、お袋。台詞が一度も無かったからってここで暴れようとするな・・・。」
作者：「ええい！口答えするやつは次回作での出番をカットするぞ！！！」
一同：「・・・・。」
作者：「では静かになったところで次回予告を・・・。」

２００２年１０月。フランスのとある空港。
７人の男女がこの地に降り立った。

「う～～～ん、良く寝た～～～。」
「ホントにぐっすりだったもんな。」

長い金髪に整った顔立ち、白いブラウスにロングスカートが良く似合う女性が大きく伸びをし、その横にいた、どこか野性的な顔立ちに金髪のショートヘアＴシャツにジーンズという格好をした女性がその時のことを語る。

「大地だ～～～～！！！」
「私は帰ってきた～～～～！！！」
「・・・あそこのアホ２人はどうする？」

ダンとノルの２人のことだ。２人はＴシャツの上にポケットの多くついたベストを着ており、どこか修羅場慣れした雰囲気が漏れていたが、アホなことを言っているためその雰囲気はぶち壊されていた。

「・・・他人のフリ。」
「・・・そうするか。」

２人が騒いでいるのを見てため息をついたのは、ニーナとラインだった。
ニーナは肩まで伸びた赤髪を紐で後ろに纏めており、どこか凛々

しさを醸し出しており、ラインは自慢の銀髪を長く伸ばしており、通りすがりの人から注目を浴びていた。

「オラそこのバカ2人。くだらねえことやってねえで行くぞ。」

2人を諌めたのは健だった。健は黒の長袖に同じく黒のポケットの多くついているジーンズを履いていた。

健に叱られ、ようやく2人は叫ぶのをやめた。

「ったく、旅行で来たんじゃねえだからもう少し大人しくしてろ。」

「だってこんなとこにくんの初めてなんだからしょうがねえだろ？」

「お前みたいに仕事で世界中飛びまわれるわけでも無いんだ。少しくらい羽目を外したっていいだろ？」

「・・・ハア。しょうがない。今日は一日観光にするか。」

『イエーィ！！』

健が渋々了承すると、健以外の全員が喜びの声を上げた。

「そうと決まったら早く行こうぜ！！」

レインが上機嫌で健の腕に抱きつく。

「ちょっとレイン！！抜けがけは許さないんだから！！」

ケイトもそう言うともう片方の腕にしがみつく。

「フフ、私達も負けられないな。」

「・・・うん。」

ニーナとラインも負けじと健にしがみつく。

「あの、動きにくいんだけど・・・。」
健が弱々しく反論するが、見事に無視される。ノルとダンはその光景を離れた場所で眺めていた。
「いやあ、青春ですな～。」
「全員２０歳(ハタチ)超えてるけどな。」
「年齢なんぞ関係ありませんよ～。」
「そう言われるとそうかもしれませんな～。」
ジジイ言葉で話している2人。ちなみにこの中で一番歳をとっているのはノルで、今年で２６歳になる。次はニーナとラインで、２４歳。残りは全員２２歳になる。
健は諦めたように息を吐くと、抵抗をやめて４人についていった。

彼らがここに来た理由はただ1つ。
かつて味わった地獄が未だに終わっていないことを知り、それを終わらせるために来たのだ。
地獄を共に潜り抜けた仲間と共に、青年は新たなる戦いに身を投じる。
全ての元凶を倒すために・・・。

作者：「とまあこんな感じだ。」
健：「こっから先は決めてあんのか？」
作者：「大体は決めてある。」
レイン：「んで、途中から変えてくわけだ。」
作者：「その通りでございます・・・。」
ケイト：「まあ、頑張ってね。」
ダン：「お前が頑張らねえと俺らは出番が無いんだからな。」
ニーナ：「まあ、これからもよろしく頼む。」
ノル：「しっかりやれよ。」
ライン：「・・・頑張れ。」
作者：「うう、お前ら最高だよ・・・。」
麻衣：「私達も出しなさいよ！！！」
源蔵：「その通りだ！！！」
作者：「安心しろ！　次回では日本に行ったりするから出番があるかもしれんぞ！！」
麻衣：「本当！？」
作者：「私を信じるのだ！！」
健：「では、今回はこの辺で。」
レイン：「こんな作者ですが、暖かい目で見守ってやってください。」
作者：「ご意見・ご感想待ってます！！」
一同：『それではまた会いましょう！！』

第一部完。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3008e/

ＢＩＯＨＡＺＡＲＤ　ＤＥＡＤＬＩＮＥ

2010年10月11日16時33分発行